

クロスロード

9



特集

進路相談カウンセラー、企業・NPO代表がアドバイス
協力隊後の仕事を考える



- 2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校
- 3 ■Contents ■索引
- 4 JICA Volunteers' Reports
- 特集
- 5 進路相談カウンセラー、企業・NPO代表がアドバイス
協力隊後の仕事を考える
- 14 派遣国の横顔 ケニア
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから
- 21 いま、読みたい電子書籍
- 22 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ
- 24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑
- 26 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり&アクティビティ
- 28 先輩隊員のシューカツ記
- 30 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員
- 32 JICA海外協力隊派遣現況
- 33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～
- 34 あの日、地球の、あの場所で。
- 35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！
- 36 公開！ 私の派遣国生活

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局



表紙によせて

小学校教員養成校でCPの先生を補佐して理科指導に携わっています。水中の微生物を観察する実習では、顕微鏡での作業にみんな興味津々。学生たちには、理科の楽しさを伝えられる教育者になってほしいと願っています。佐藤 綾さん（カンボジア/理科教育/2021年度7次隊・福島県出身）
佐藤さんの日常を紹介するJICA公式動画▶



■国別索引	掲載ページ
インドネシア	10、23
ウガンダ	35
エジプト	34
ガーナ	2、8
カンボジア	1
ケニア	16、17、18、19
サモア	28
ジブチ	26
ジンバブエ	15
タンザニア	6
チュニジア	7、12
フィリピン	4
パラオ	36
ペルー	24
マダガスカル	24
マラウイ	30
マレーシア	21

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	19、30、34
村落開発普及員	23
食用作物	10
青少年活動	17
理科教育	1
理数科教師	8、16
環境教育	18
柔道	24
小学校教育	2、26、28、35
日本語教師	4
秘書	6
視覚教育	7
システムエンジニア	15
栄養士	36
医師	12
作業療法士	21

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	26
宮城県	16
福島県	1、8
東京都	15、17、35
神奈川県	19
長野県	4、18
愛知県	7、12
新潟県	21
福井県	10
京都府	30
大阪府	23、34、36
兵庫県	24
和歌山県	28
広島県	6
島根県	2
熊本県	24

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力隊員さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)	氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



子どもたちに伝えたいSDGs

世界の学校

道具も素材も足りないが、「ない」ことではなく「ある」ものに目を向けて情操教育に生かしている。テラーが多いガーナでは洋服の端切れがたくさん手に入るため、歴史と文化で学んだアフリカの民族衣装を表現した作品作りに使用した

サンダルの裏の模様で舟を、葉っぱで海を表現したフロッタージュ作品を手にする子ども

身の回りにある自然や物に目を向けて 自分のアイデアを表現する楽しさを伝える

栗栖 潤さん(ガーナ/小学校教育/2022年度1次隊・島根県出身)



ガーナ南東部にあるベキチャメ小学校でフリーエイテイブ・アートの授業を担当しています。これは日本の総合的な学習の時間と、図工、音楽を合わせたような教科で、子どもたちの情操教育が主な目的です。

全学年で1学期は歴史と文化、2学期は環境、3学期は社会問題をテーマにして学びます。例えば環境がテーマの時は、自然物や人工物にはどんなものがあるかを考え、高学年なら社会的環境についても学び、次の授業では作品を作ります。

身の回りの物を使った作品作りの例として、私はフロッタージュという対象物を紙の下に置き、上からクレヨンなどでこすって模様を写し取る技法を教えました。自然の葉っぱ、コインなども使用しました。写し取るだけでも楽しいですし、組み合わせることでもいろいろなものも表現することもできます。高学年の児童の中には、葉っぱのフロッタージュで自然にいる動物の形を、サンダルの裏のフロッタージュで舟の形を描いた児童もいました。

隣同士で協力して一つの作品を作る児童もいて、お互いの感性が合わさることによって、表現の幅が広がることを実感しました。

学校では作品を飾る習慣がなかったため、現地の先生と協力して、クラス全員の作品を展示したところ、子どもたちは大喜びでした。そして、他の児童の作品に対して「このアイデアはいいね」「あなたの色はすてきだね」と話していました。

多様性を認め合うこと、作品を生み出す楽しさを感じること、そうした意識や気持ちが大さだと授業で伝えてきたので、子どもたちがお互いのいいところを見つけてくれる機会にもなると嬉しく感じました。先生方にも情操教育の可能性に気づいてもらえるよう、研修やワークショップを行うことも考えています。

進路相談カウンセラー、
企業・NPO代表がアドバイス

協力隊後の 仕事を考える



任期満了後の就職先を探す場合、いつから行うべきか。早い段階からインターネットで情報収集し、企業と連絡を取るべきかと悩んでいる隊員もいるかもしれない。そこで今回は青年海外協力隊事務局の進路相談カウンセラーと、企業・NPOの代表に取材し、進路の考え方や現役隊員のうちにできることなどを聞いた。全員協力隊OVなので、先輩隊員でもある。それぞれの話を参考に自分に合った方法を考えてほしい。

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Japan

難民や外国をルーツにする子どもたちの 学びを“ご近所さん”として支えて

矢崎理恵(旧姓 倉品)さん (フィリピン/日本語教師/1981年度4次隊・長野県出身)



難民など、日本に定住する外国人の自立を支援する社会福祉法人「さぼうと21」で、学習支援室のチーフコーディネーターを20年ほど務めています。協力隊から帰国後、日本語教育に携わりながら国際協力に関わりたいと模索していた頃、この仕事に巡り合いました。

学習支援事業の運営と共に助成を頂く関係機関などをつなぎ、継続的な支援体制を整備してきたことが評価され、令和4(2022)年度文化庁長官表彰を頂きました。受賞は私個人というより、当法人に力を貸してくださるボランティアの皆さん、学ぶことで自立の道を歩んでいる難民と呼ばれる皆さんの、すべての頑張りを評価して下さったものと思っています。

学習支援室は、一人ひとりの学習者の置かれた環境やそれぞれの目標に応じて学習の方法や教材を決め、必要な時は学習者が通う学校や居住先の役所にも出向きます。

最も長く行っているのが、毎週末の対面型の教室です。現在、シリア、アフガニスタン、ミャンマーなど、子どもから大人まで約100人が日本語、学校の教科、パソコンなどを学んでいます。大人は職場では仕事に必要な会話しかないことも多いため、母国の話題をじっくりと話しながら

日本語を学ぶ人もいます。それら学びを支えるのが高校生からリタイアされた方までの、学習者とはほぼ同じ人数のボランティアです。学習者が限られた時間で効率よく学べるよう、適性や相性を考慮して学習ペアを決めています。いわゆる勉強だけでなく、防災など生活に必要な知識を伝える機会も設けています。

東京・千葉の4拠点で対面型教室を運営するほか、コロナ禍でオンライン型支援も行うようになりました。2022年2月からは、主に群馬県館林市に暮らすロヒンギャ難民2世の小中学生約60人を対象にしたオンライン教室も始めました。

母国から逃れてきた難民と呼ばれる方々は、必ずしも日本を選んでやって来たわけではありません。経済的にも精神的にも困難な状況から生活を始め、日本語を身につけていかなければならない方たちです。夫婦や親子が長期間、母国と日本とに別れて暮らすことで関係が不安定になり、日本で一緒に暮らせるようになっても別居を余儀なくされる場合もあります。

日本では一般的に子どもは成長と共に学ぶ場所が変わり、進学やキャリアについて保護者が情報を与えて見守り育てますが、難民の方々の家庭ではそれが難しい。私たちは、ご

近所さん”のように長くつき合い、皆さんが安心して学び、それぞれの気持ちを聞ける場でありたいのです。

本当は皆さんがお住まいの地域にそうした場があることが一番です。ボランティアの皆さんを見ると市民の誰もが担える役割があると感じます。日本に暮らす外国人にちよつとした配慮をしたり、声をかけたたりすることの積み重ねが社会や行政を動かす、世の中を変えていく力になると信じています。



1 2022年2月に開講したロヒンギャ難民2世を対象にした「たてばやしオンライン学習支援教室」開講式。母親たちが見守った。「日本での生活が長くなり、親御さんから子どもたちの教育について切実な相談が寄せられたことに応えたもの。日本各地からだけでなく、海外からもボランティア参加してくださっています」と矢崎さん 2 楽しいイベントも多い学習支援室。ここを卒業した後に、「ここは私の実家」と言ってボランティアとして戻ってくる元教え子もいる

協力隊後の仕事を考える



進路相談カウンセラー (JICA市ヶ谷)
 いとうあさき
伊藤亜紀さん
 チュニジア/視聴覚教育/
 1996年度2次隊・愛知県出身
 産業カウンセラー

——多様な生き方や働き方が認められるようになり、かつてより就職活動（以下、就活）はしやすくなってきているように感じますが、それでも決まるまでは不安です。協力隊後の進路はいつ、どのように考え始めるといいでしょうか。

岡部さん 進路を考え始めるのは派遣前、中といつからでも構いませんが、就活は相手があつてのことなので、タイミングは人によって大きく異なります。

派遣中は特殊な環境にいますので、帰国後にやりたいことがたくさん頭に浮かぶでしょう。でも、それは実際の労働市場において仕事になるか情報収集と確認が必要です。また、任期終盤は活動のまとめに入る時期ですから、膨大なエネルギーを必要とする就職活動と並行して行うのは大変かもしれません。

進路相談カウンセラーによっても考えは違いますが、私が派遣中の就活は向き不向きがあるので、できる方は応援しますが、ご自身のペースで帰国後に進めたいとお伝えしたいです。

伊藤さん（以下、敬称略） 例えば、進みたい道が決まっていって、年に1回しか受験できないとか年齢制限があるといった場合

——では、進路に向けて派遣中にやれることは何でしょうか。

岡部 就活を始める前段階の、未来を見据えて方向性を決めていく時間やプロセスも大切です。「記録すること」もその一つです。派遣直後はすべてが目新しく、まめに記録することが多いと思いますが、「こんなはずじゃなかった」といったマイナスの思いも記録に残しましょう。できなかったこと、うまくいかないことも含めて活動報告書をきちんと書いておけば、自分の成長の証しとなり、あとで就活や人に伝える時にも活用できたりします。写真も改善後の様子だけでなく、改善前も撮っておけば、帰国後に活動の様子をプレゼンテーションする際、BeforeとAfterをわかりやすく示せます。忘れがちなのが活動中の自分の姿です。同僚や隊員などに頼んで現地の方々と一緒に仕事をしている様子を撮ってもらいましょう。

帰国後の進路として、海外進学をする際に推薦状が必要となる場合があります。「あなたのためなら一筆書くよ」という方を見つけておくのも派遣中にしかできないことです。

伊藤 ご自身のスキルやキャリアといった

進路相談カウンセラーに聞く進路の考え方

現役隊員が今、すべきことは？

▶活動記録をつけ続ける

活動中の失敗（残念な記録）は特に大事。自分の写真を撮ってもらうことも忘れずに。

▶活動先で信頼関係を築く

カウンターパートやJICA在外事務所関係者は、あなたの取り組みを客観的に見ています。信頼関係ができていれば、後に推薦状などを書いてもらいやすくなることも。

▶アピールポイントをたくさん探す

協力隊での経験だけでなく、派遣前の経験も含めてアピールポイントを探し、まとめましょう。

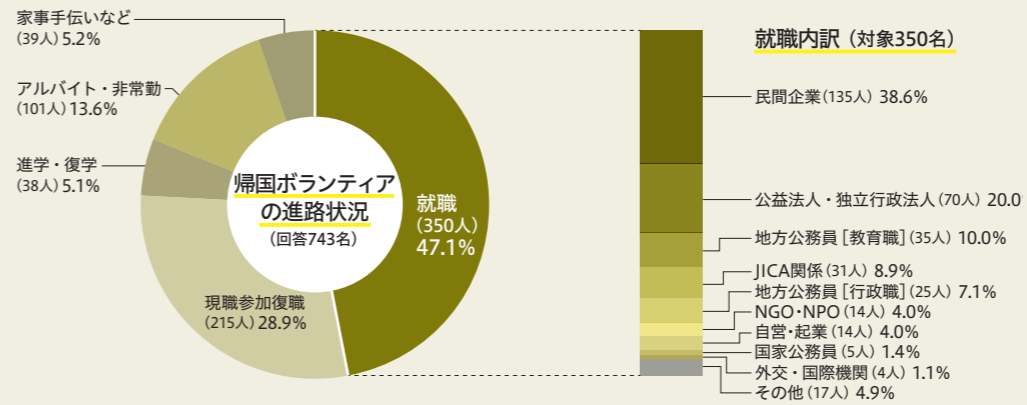
▶帰国ボランティアの進路状況

2019年4月1日～20年3月31日までに帰国した青年海外協力隊および日系社会青年ボランティア（計919名）にアンケートを行い、2019年4月～21年5月までに回答があつた743名の進路状況を集計した一部。

※20年4月以降はコロナ禍における一時帰国者等が回答対象者となり、通常時の集計を取ることが困難なため過去のデータを使用

※詳細は下記ウェブサイト

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/careerinfo/



は、派遣中に余暇を使って準備してもいいでしょう。ただし、焦って進路を決めることは私もお勧めしません。派遣中は目の前の環境に意識が向きがちです。例えば現地を声をかけられたローカル採用がよく見えたりしますが、長く勤められないこともあります。どんな働き方を望むのかよく考えてみましょう。現地在住の日本人の意見を聞くのもよいのですが、自分でもよく調べ、情報はバランスよく取ることを心がけてください。

——青年海外協力隊事務局からは、派遣中隊員に、帰国後の進路に関する支援メニューの紹介や社会還元に関する情報について、四半期ごとにメールで配信があります。また、派遣終了3カ月前には、在外事務所を通じて各隊員に「進路希望調査票」が送られます。そうした際に進路について考えたり、外部の業者を含めた各所に相談し始めたりする隊員もいると思います。

岡部 帰国直後に実施している帰国時プログラム（※）では、進路相談カウンセラーなどの相談窓口をご紹介します。また帰国後研修では、外部講師による協力隊活動の棚卸しなども行われます。



進路相談カウンセラー (JICA横浜、JICA市ヶ谷)
 おかべけいこ
岡部恵子 (旧姓 伊藤)さん
 タンザニア/秘書/
 1981年度3次隊・広島県出身
 国家資格キャリアコンサルタント

キャリアの考え方として強調しておきたいのは、派遣前・派遣中・派遣後はつながついて、ペースとして派遣前に何をし、何を考えていたかが帰国後の進路にも関係してきます。そうしたことを客観的に何としてサポートしていくのが我々進路相談カウンセラーです。

伊藤 派遣中の就活では、情報収集や書類作成・提出、面接などオンラインで行う際は任地のIT環境も影響するでしょう。応募書類の作成や面接対策に思いのほか時間がかかることもあります。当然ながら派遣国では日本語を使う機会が減るため、就活に適した日本語が出てくるということもあります。企業の採用活動はシビアなので、こうしたテクニカルな部分で損をするのはもったいないと思います。

アピールポイントをできるだけたくさん掘り起こしておきましょう。自分がアピールしたいと思つたことが、相手が聞きたいスキルではない場合もありますから、あなたが協力隊以前にやつてきたこともひっそりめ、幅広く考えてみましょう。

——派遣中に修得した語学力もアピールポイントの一つでしょうか。将来のために現役隊員のうちから、余暇に自費でなまりのない英語やフランス語、スペイン語を習っていた先輩隊員もいます。

岡部 ビジネスレベルの英語は需要が高く、フランス語、スペイン語でも求人があることがあります。またそれ以外の言語も見つかるかもしれません。ただ、多くの場合、協力隊の2年間を普通に過ごして得た日常会話のレベルでは太刀打ちできないように思います。語学を武器にして就職を考えるのであれば、余暇を使って習ったり、資格試験を受けるなど、学習を続けてみましょう。もともと語学に堪能な隊員で、派遣国

で政府機関向けに英語の報告書を提出した隊員もいます。また使っているのが現地語の場合でも、現地で頑張つて習得して、配属先向けに現地語の業務マニュアルや教科書、教材を作った人もいます。そうした方の中には派遣国で事業展開をしている日本企業や、外国人を雇用している企業に就職するケースもあります。

伊藤 語学は会話とあわせて読み書きのスキルを上げておくことが重要ですが、それも進路次第です。外国語をまったく使わない職場を選択する方もいますから、明確な進路を描かないまま語学に時間を費やす方がいいかはわかりません。

自分の進路に関する不安の理由は何か、その正体を考えてみましょう。経済的な面から「早く就職しなければ」と焦る方もいれば、「周囲が進路を決めているのに自分は動けないでいる」とか、「自分に合う仕事、やりたい仕事が見つからない」が理由の方もいます。本当に進みたい道を見つけれられるよう、私たちがサポートします。

進路を考える上で役立つサイト

JICA海外協力隊
 ウェブサイト
 サポーター宣言



<https://www.jica.go.jp/volunteer/supporter/>
 JICA海外協力隊をサポートしている企業や団体、自治体、教育機関などのさまざまな連携事例を紹介。

LinkedIn
 JICA海外協力隊
 帰国後の社会還元における
 情報共有グループ



協力隊経験を生かした社会還元活動に関心のあるOVが参加し、情報提供や情報共有を行う。

LinkedIn
 JICA海外協力隊
 社会起業・兼業グループ



日本国内で起業・兼業を考える協力隊OVと、起業・兼業している協力隊OVや外部団体が参加。

JICA海外協力隊
 ウェブサイト
 帰国した方へ



<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/>
 帰国隊員の方に向けた無料職業紹介や進路開拓支援といった情報の提供先をまとめたサイト。

青年海外協力隊事務局は進路相談カウンセラーを配置し、帰国隊員の就職や進学の相談にのっている。今回は経験豊富な2人の進路相談カウンセラーに伺った。

協力隊後の仕事を考える

JICAの技術協力プロジェクト「バングラデシュの小学校理科教科教育強化計画プロジェクト」をパデコと広島大学が受託。バングラデシュの教育関係者に向け、教育セミナーを行う相馬さん(2011年)



<株式会社パデコ>

1983年に設立された国際開発コンサルティング会社。JICAや国際機関などの援助計画に関する具体的なプロジェクトの調査、立案、実施までを遂行する。運輸・交通、都市・地域計画、教育、人材開発、ガバナンス、産業開発、環境および気候変動対策など幅広い分野の課題解決に取り組んでいる。



株式会社パデコ
代表取締役社長
そうま たかし
相馬 敬さん

ガーナ/理数科教師/
1990年度1次隊、
SV/ガーナ/理数科教師/
1995年度9次隊・
福島県出身



企業・NPO代表に聞く 必要とされる人材

株式会社パデコの国際開発コンサルタントに 求められるのは「専門性」と「柔軟性」

パデコにいる約130名の社員のうち私を含めて24名がJICA海外協力隊の出身者(以下OV)です。経営陣には2名、部門長など管理職にも女性を含めて3名います。途上国の教育や人材開発をサポートする教育開発部には特に人数が多く、OVがすんなりフィットしているように感じます。人間性が特に問われる事業分野だからなのかもしれません。コンサルタントとしてチームで働いて成果を出すためには、専門知識と技術だけでなく人間性も重要なのです。OVに共通する人間性としては、コミットメントと責任感があることがまず挙げられます。プロジェクトの遂行中に思うように進まないことがあっても他人のせいにはせず、「自分事」として最後まで取り組む傾向があります。協力隊は自分の意志で参加する活動なので、当事者意識が

高い人が多いのも不思議ではありません。もう一つの共通点は「現場主義」です。不慣れた場所であっても目の前の現実から目を背けず、辛抱強く取り組む姿勢ともいえるでしょう。多様なプロジェクトにゼロから参加するコンサルタントには不可欠な資質です。実は、私自身には協力隊時代に職

場から逃げ出してしまった苦い挫折経験があります。ガーナでの任地は他の教育隊員も多くいる海岸地域ではなく、北部のサバンナ。町の日本人は私一人きりでした。高校の50、60人クラスで数学を教える要請だったので、新卒の私には教育技術が伴っておらず、英語もあまりできません。何もできない自分と向き合うのはつらかった。食事も口に合わ

ずに体力が落ちてマラリアにかかったりして。教室にどうしても足が向かわなくなり、病氣と偽って他の隊員のところに逃げ込んだのです。その後、英語が少しずつ話せるようになり、同僚のガーナ人の奥さんがおいしい手料理を私にも振る舞ってくれることになって、教室に戻ることもできました。その頃から気持ちにも変化が起こり、「自分がやり



①ラオスの基礎教育改善プロジェクト。初等教育の算数学習の改善を目指す ②インドのムンバイ地下鉄3号線建設に向け、現地調査を行ったトンネル ③バングラデシュ銀行の都市建物安全化セミナー

たいから」ではなく「相手のために何ができるか」という気持ちに変わっていったのを感じています。その頃、隊員の仲間を事故で亡くしたことも大きく影響しました。

ありがたいことに生徒たちは「僕たちには先生が必要なんだ」と言ってくれました。ガーナでは理数科を教えられる教師が少なかったため、本当に必要だったのです。当時は授業を週28コマも担当していました。他の先生の見よう見まねでしたが、なんとか授業を進められるようになりました。それからの私は「とにかく授業を休まない」ことを自分に課しました。「現場感」を大事にできるように努めました。きっかけがあり、コンサルタントとしての私の原点だと思っています。

多くのコンサルタントが 英語圏の大学院で 修士号を取得している

現役隊員には「目の前の仕事から逃げないで全力で取り組む」ことをまずはお願いしたいと思っています。一度は逃げ出してしまった私が言うのだから間違いありません。最初は困難な状況にあっても急に好転する瞬間があります。今までアウェイだった自分が現地の目線になるようなパラダイムシフトです。こうして培われた人間性は、コンサルタントを目指すか目指さないかにかかわらず、

これからの職業人生に大きな意味を持つでしょう。帰国してからは高校の理科教師をやり、2000年にJICAの専門家としてガーナの理数科教育改善のため、現職教員研修を制度化するプロジェクトに参加しました。10年前の教え子たちの一部が教員になっていて、研修会場で再会に感激しました。その時の専門家のチームリーダーの方から「この仕事を続けたいのなら(大学院)留学をしないさい」とアドバイスしてもらったのも大きかったと思います。英語には苦勞しながらもイギリスの大学院で修士号を取得しました。

コンサルタントには専門性と柔軟性が重要だと私は実感しています。専門性とは「高い技術力」に他なり

ません。柔軟性は先ほどお話しした人間性にも通じる点があります。状況を俯瞰して見て、他人の立場を思いやり、チームをマネジメントする力も含まれます。

個別の技術がどのような仕組みで生かされるのかわかるためには、大学院での学びが役に立ちます。特にイギリスは徹底した文献調査をした上での論文提出を求められるため、私も過去の論文を200本以上は読み込みました。すると、自然と俯瞰する視点が身につくようです。国際開発コンサルタントには英語力が不可欠なので、学術用語も含めた英語から逃げられない環境に自らを追い込んだのもよかったです。条件さえ許せば英語圏の大学院に行くことをお勧めします。実際、

コンサルタントの多くが海外の修士号を持っています。国際開発の場でニーズがある専門性には移り変わりがありません。ただし、プロポーザル(案件受注のための提案書)で採点対象となるのは、チームリーダーおよびキーとなる専門家です。その他のスタッフは対象となる地域や技術分野が専門でなくても問題ありません。

つまり、自分の専門性は磨きつつも他の分野にも挑戦することができると。チームメンバーから他の技術を学び、自分の履歴書を強くしていくルートです。「自分はこれが専門です」と自負することも大切ですが、他の人から「あなたはこれでもできるんじゃないか」と求められ、評価されていることも忘れないでください。

【相馬さんの協力隊後のキャリア】

1994年 任期を1年延長して協力隊から帰国後、慶應義塾高等学校地学科講師などを務める。

1995年 短期のSVとして協力隊に参加し、再びガーナへ。また2000年にJICAのプロジェクト専門家としてガーナに赴任。

2003年 英国サセックス大学大学院国際教育学修士課程に留学(～05年修了)。「2000年のガーナのプロジェクトで一緒に働いた専門家の方から大学院留学を勧められ、思い切って留学しました」

2005年 株式会社パデコ入社。教育開発部/海外事業推進管理部長を経て、19年に取締役、執行役員。

2020年 同社代表取締役社長に就任。

現役隊員が今、すべきことは?

<国際協力プロフェッショナル検定>

世界110以上の国で国際開発を行ってきたパデコは、実践的なセミナーと検定試験「国際協力プロフェッショナル検定」を実施している。「国際協力・国際開発の仕組みを俯瞰するのに役立つ内容です。海外留学は難しいという方、初心者だけでなく、プロとして基礎知識を固めたい方にもお勧めします。申し込みから受講、受験まですべてオンラインで完結し、世界中から受講できますので、ぜひ!」(相馬さん)

<https://padeco-academy.jp/kentei-info.html>



協力隊後の仕事を考える

①農園たやでは、同社スタッフがJICA海外協力隊の民間連携で派遣されるインドネシア・タンジュンサリ農業高校の卒業生を技能実習生として迎え、参加した若者を「考える農民」へと変えていく ②取れたて野菜の出荷作業



<株式会社農園たや>

福井市高屋町で代々農業を営む田谷家。日本で農園を営みながらインドネシアの農村開発に関わり続ける志を持った田谷さんが2007年に設立し、18年に株式会社化。少量多品目で循環型の農業を実践しつつ、インドネシアからの技能実習生を常時受け入れている。



農園たや 代表
た や とおる
田谷 徹さん

インドネシア/食用作物・
稲作 / 1997年度2次隊・
福井県出身

Case2

株式会社農園たやで、
国際協力と農業の両立に必要なのは、
「パッション」と「ロジカルシンキング」

インドネシアの農村部の開発に関わり続けたい、若い人が成長するのを見るのが楽しい……。そんな私にとって農業は手段でしかありません。2007年に農園たやを設立してからも、技能実習制度を活用して、インドネシアの若者と農園で働いてきました。さまざまな問題が指摘されました。さまざまな問題が指摘される技能実習制度ですが、私たちはこの制度の本来の目的である国際協力を常に念頭に置いています。具体的には、実習生たちに学びの場を提供しつつ帰国後の活躍につなげてもらうことです。

実習生は、インドネシアの農業高校出身者の中から地域貢献できそうな人材を高校主導で選考しています。また、日本に来る前から、技能実習終了後に手がけるビジネスを調査して考えてもらっています。日本で得られる経験とお金の投資先をイメージできれば、3年間の実習中も主体的に活動できるからです。それをしていくため、例えば、帰国後は飲食店を開きたいという人は、農園の定休日日本の飲食店を見学したりと積極的です。

農園での実習は圃場での多品種の「パッション」も不可欠で、弊社の入社試験では作文を書いてもらうことでそこを見ています。ロジカルといってもキレイにすらすらと読める文章でなくて構いません。むしろ、いい意味での「いびつさ」があるような人に私は興味を持ちます。農園のナンバー2である農場長を務めている佐藤高史(ボリビア/野菜栽培/2009年度3次隊)にもそのいびつさがありました。彼は東京都出身のOVです。「国際協力はもうからないよ」と面接の時にくぎを刺したのですが、「収入面も気にはなるけれど、農業だけをやっている自分は想像ができない」ととつとつと語ってくれました。ならば一緒に苦労しようかと現在に至ります。私は技能実習制度と協力隊は似ていると感じています。どちらも期限つきで海外に派遣されることで、自分が立っている位置を客観的に知り、その上で自分の近い将来をじっくり考えることができます。

自国の社会通念が通じない場所では今までの価値観が揺らぐ体験をします。既存の人間関係も一時的に断たれます。そんな時間で自分の考えが整理されていくのです。

技能実習生も協力隊員も、本人の成長という観点からは主体性が何より重要です。失敗をしてもいいから自分が「やりたい!」と思ったことをアクションにつなげてみましょう。もちろん、これからやりたい仕事に

野菜作りが中心ですが、実習生がその栽培技術をそのままインドネシアで使うことは想定していません。日本とインドネシアでは生産条件も市場特性も異なるからです。実習生に身につけてほしいのはマネジメント力であり、グローバルな視点を持ちながらローカルで持続可能な行動を起こせる力です。弊社では1年2学期制で座学も用意しており、実習生は農業と食の基礎から社会学、さらにはビジネスプラン作りまでを学習。最終年である3年目にはそれぞれが作ったビジネスプランを基に卒業研究をして、日本語でプレゼンテーションをしています。

もちろん、弊社にもメリットがあります。現在、農園の日本人スタッフは高齢の両親も含めて7名。同じく7名の若いインドネシア人スタッフのほうが主力です。彼らが一人の大人として主体的に働いてくれるか否かは農園の経営を左右します。農業の現場はもともと人の入れ替えが多いので、素人でも短期間で最大限の成果を上げられるような合理的な仕組み作りも必要です。土曜日は定休日、冬場は週休2

ついてインターネットで情報収集することもアクションの一つ。私はそれを「能動的な経験値」と呼んでいます。受け身でやったことは血肉にはならないからです。現役隊員の方には、考える時間を大切にすると同時に、成功だけでなく失敗体験も心に留めることをお勧めします。私自身、1997年にインドネシアのバル県に派遣された時は何をやってもうまくいきませんでした。県の制度に乗っかって水田の裏作用に農家に落花生を配布。しかし、芽が出ず彼らの労力が無駄になりました。生活のために見込んでいた収入を得ることができず、村人から責められ、ストレスで顔面がマヒした時期もあります。

日になり、残業は一年を通じてありません。インドネシアからの実習生には余暇を活用して日本のいろんなところを見て楽しんでほしいと思っています。

実習生たちはインドネシアに帰った後は、それぞれのプランに沿ってビジネスを展開しています。農園たやも支援を惜しみません。私は年に1回はインドネシアを訪れて実習修了生の地域を巡回して相談に乗っています。修了生の中には若くして村の集落長を務めるまでに成長した人もいて、嬉しく感じているところです。

その失敗に懲りて、私はやり方を根本的に変えました。自己資金をデポジットしてでも参加したい人だけを募って、三つのグループに分けてエシャロットの栽培と販売をしたのです。現地の農業については私よりも彼らのほうが詳しいのでタネの選定や栽培はすべて自主性に任せて、私は預かったお金の管理とプロジェクト進行に徹しました。栽培には成功したのですが、インドネシアは1999年に通貨危機に陥り、IMFの方針で農業分野の自由化が進みました。フィリピン産の安いエシャロットが大量に流入して、価格が75分の1になってしまい、結果としてこのプロジェクトも失敗に終わってしまいました。しかし、今度こそは誰か私を責めませんでした。村



農園たやのスタッフとインドネシア人の技能実習生たち

協力隊の失敗体験から学んだこと。

採用面接ではそれを語るべき

弊社で日本人スタッフに最も重要なのは、外国人への拒否感を持たず、同じ人間としてリスペクトできる姿勢です。自分が海外でマイノリティになった経験があるOVの場合、この条件は難なくクリアする人が多い印象があります。国際協力と農業を同時に行うためには「パッション」と「ロジカルシン

一人ひとりが与えられたことをただやるのではなく、自分事として取り組んでいくからです。

人が気持ち良く動くためには何が必要なのか。その行動原理のようなものをつかんだ経験です。現役隊員の方々にも失敗から学んだことを大事にしてほしいと思います。それは採用面接でも有効なはずですが、繰り返すしになります。技能実習生と同じく、協力隊員も「主体性」を持つことが肝です。主体的になるためには目的意識を持つことが必要

で、できれば出発前に「協力隊での経験を何に生かすのか」を具体的にイメージしておくべきなのです。今からでも遅くはありません。目的意識を持って明日からの活動に取り組んでみてください。

田谷さんの協力隊後のキャリア

1997年 海外協力隊に参加。「現地の方に『もう1年いてくれ』と頼まれて、1年延長しました。この1年では公務員女性グループと農家グループを引き合わせ、学校や病院での野菜の移動販売を実施。直販によって高い利益を上げましたが、野菜の振売りは社会的な地位が低いので、私が帰国した後はやらないと農家の方に言われました。社会に目を向ける必要性を痛感しました」

2003年 インドネシアのポゴール農科大学大学院に入学。「農業ではなく社会学を2年間かけて学びました」

2007年 地元にて就農。農園たや設立。「父親とは方針が異なるので経営を分けて自分の農園を営むことにしました。大学院時代にインドネシアの農村部の開発に関わり続ける方法を考え続け、行き着いたのが技能実習制度の活用です」

2012年 インドネシアとの交流活動や地域づくり活動が認められ、第8回JICA理事長賞を受賞。

現役隊員が今、すべきことは?

<サマサマ手帳>

外国人と関わる場を重視し、その場から生まれる双方の社会の創造に力を入れることを目指す農園たや。インドネシア人の技能実習生・研修生を受け入れる農業事業者が理解を深め、より良い受け入れ環境を作れるよう同社の取り組みを紹介するサイト。



※サマサマ (sama sama) はインドネシア語で「どういたしまして」という意味。

https://www.sama-sama.jp/

協力隊後の仕事を考える

- ① 日本に住むネパール人対象の母親学級で栄養について説明するシェアのスタッフ。このほか、「母子保健通訳相談窓口」なども開設している
- ② カンボジアで行っている子どもの健診の様子



<NPO法人シェア=国際保健協力市民の会>

1983年に設立された保健医療分野専門のNGO。途上国において保健医療サービスが受け難い環境にある住民の健康改善を目的として活動している。日本人専門家を現場に長期間派遣し、現地の人の主体性を尊重しながらプロジェクトを実施するのが特徴。海外だけでなく、在日外国人に対する医療分野での支援活動も行っている。結核やHIVに関する医療通訳派遣や医療電話相談など幅広く活動。2021年からは、東京都内に住むネパール人母子の支援を重点的にしている。



(認定) 特定非営利活動法人
シェア=国際保健協力市民の会
理事/前代表
ほんだ とおる
本田 徹さん

〔チュニジア/医師/
1976年度3次隊・愛知県出身〕

Case3

〔認定〕特定非営利活動法人シェア=国際保健協力市民の会は、 プライマリヘルスケアの最前線。 「弱い立場にいる人への共感能力」が不可欠

私が北海道大学の医学部を卒業した頃は学生運動が続いており、人生の羅針盤というべき存在が周囲には見当たりませんでした。

道内の病院で3年ほど研修医として働いていましたが、「今のままでいいのだろうか」という気持ちが消えず、思い切って異文化の中で自分の腕を試してみようと思いました。どうせ行くならまったく知らないイスラム圏がいいと、協力隊に応募。チュニジアに派遣されたのが1977年のことです。医師の参加は協力隊史上2人目だったと聞いています。

チュニジアではジェルバ島に赴任し、病院の小児科を任せてもらいました(※1)。住民の中に溶け込んで働かせてもらうことができたと思います。非常にラッキーなことに、チュニジアでの活動中にアルマ・アタ宣言(※2)のニュースが飛び込んできました。この宣言によって世界中に広まった「プライマリヘルスケア」の概念は、今でいえばSDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」に通じる内容です。

私は派遣前に佐久総合病院の若月つきもんです。任地での経験があるOVはフレキシブルに対応ができ、言語習得も早い傾向があります。コミュニケーション能力も高く、現地と違和感なく溶け込んでいくのです。とても信頼しています。

シェアの現場では、さまざまなつてをたどって現場の中に入り、リーダーとして働くことが身上了。現地スタッフを引っ張るには当事者意識が不可欠で、その点でも自らの意志で協力隊に参加した経験のあるOVは資質を備えていると感じています。

途上国で苦勞をすると、弱い立場にいる人への共感能力が磨かれるのだと思います。それはシェアのような組織で働く上で最も大切なことです。

生活の場も含めた現場に入っていくことの重要性はプライマリヘルスケアの観点からも欠かすことはできません。以前から日本の医療機関は「3時間待ちの3分診療」などと批判されてきました。患者と向き合わずにパソコン画面を見つめてばかりの診療をする医師も少なくありません。

私は医療のデジタル化に反対するわけではありませんが、人と人との信頼関係やコミュニケーションは医療の基本です。特に生活習慣の観察が必須の予防医療は市井の人たちの生活に入り込んでいかなければ適切な分析はできません。

俊一先生が著した『村で病氣とたたかう』(岩波新書)を読んでおり、予防医学を中心とした農村医療の取り組みがアルマ・アタ宣言とつながっていると感じています。鍼灸は医療設備の整っていないような場所でも使える治療法だからです。

帰国してから憧れの佐久総合病院で4年間勤務させてもらい、東洋医学を学ぶために東京の日産厚生会玉川病院に転じました。鍼灸は医療設備の整っていないような場所でも使える治療法だからです。

当時は日本におけるNGOの勃興期であり、私はJVC(日本国際ボランティアセンター)の医療班にも参加しました。この医療班が保健分野に特化したNGOであるシェア=国際保健協力市民の会(以下、シェア)の前身であり、88年から今年4月までは私が代表を務めました。現在は、東ティモールとカンボジアに看護師や栄養士を長期派遣し、医療・保健現場に参加しながら現地スタッフの育成を行っています。

日本人を長期で海外に派遣するのは資金確保が大変です。在外事務所維持管理も含めて1人あたり年間1千万円以上はかかります。そのた

例えば、小さな子どもの栄養失調両親が仕事で忙しくておばあちゃんが駄菓子で育ててしまっている生活事情があったりします。患者の症状だけを見るのではなく、なぜこの病気がなったのかという背景にも目を向けなければならぬのです。

佐久総合病院では劇団部を結成し、当時は娯楽が少なかった農村の人たちが楽しみながら公衆衛生について学べる取り組みを続けていました。シェアも重要な手法だと位置づけしており、歌うことが好きな人の多い東ティモールでは、「回虫をやっつける歌と寸劇」を子どもたちに見せて、子どもから親へと手洗いなどの重要性を伝えていきます。

病院の中にこもるのではなく、積極的にコミュニティの中に出ていく



① シェアでは女性普及員の育成も行う。日本在住外国人の妊婦さんの家で説明を行うネパール人女性普及員
② 研修で栄養について学ぶ、東ティモールの現地保健ボランティア

め、シェアで雇用し続けるのは難しく、海外プロジェクトから帰ってきた方には次のキャリアを目指してもらうことがほとんどです。幸いなことにシェアでの活動経験はキャリアアップにつながるようで、国際機関や保健分野の研究機関、他のNGOなどに移る方が少なくありません。協力隊との親和性も高く、過去20

こと。アウトリーチと呼ばれる手法で、シェアでも重視しています。協力隊の精神にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

キャリア形成を考える現役隊員の方にお勧めしたいのは、「任地での活動を最優先に考えて全力で取り組む一方で、今の活動が長い目で見て自分にとってどのような意味があるのかという視点を持つこと」です。協力隊での経験を将来の肥やしにするためです。

そのような視点を持ちながら、並行して情報収集をすることもお薦めします。

隊員時代、私は『The New England Journal of Medicine』という権威ある医学総合情報誌をチュニジアでも毎週購読していました。

そのような視点を持ちながら、並行して情報収集をすることもお薦めします。

人以上のOVがシェアの一員になってくれました。現在、東京事務所のチーフスタッフにもOVがいます。

情報収集を怠らなければ、次のステップにつながる、何かに出会える

途上国での活動には失敗や苦勞が

た。医学の最先端情報が載っている中で、医師として遅れてしまっていると感ずることなく、むしろ感度を高めてアルマ・アタ宣言の「プライマリヘルスケア」にぶつかり、次のステップへと進む大きな足がかりとなりました。

現在の隊員なら、デジタルツールを使って世界中の技術の最先端に触れることができます。情報収集を怠らなければ、次のステップにつながるような何かに必ず出会えることでしょう。

※1 協力隊事務局では、一律に医療行為(身体への侵襲行為)を禁じていないが、派遣される国によって状況が異なるため、個別の要請調査票を要確認。
※2 1978年9月、旧ソビエト連邦(現カザフスタン共和国)のアルマ・アタでWHOとユニセフの共催で「プライマリヘルスケアに関する国際会議」が開催された。143カ国の政府代表と67の機関が参加し、1週間わたる会議の最終日に採択されたアルマ・アタ宣言では、「すべての人々に健康を」というスローガンの下、健康が基本的人権であることを明言した。

〔 本田さんの協力隊後のキャリア 〕

1979年 協力隊から帰国。佐久総合病院(長野県)の内科に勤務後、日産厚生会玉川病院(東京都)勤務。

1983年 シェア=国際保健協力市民の会の設立に参加。東京・山谷地区の医療活動やエチオピア飢きんへの緊急支援などに参加。

1988年 シェアの代表に就任。
1991年タイ・マヒドン大学修士課程でプライマリヘルスケアを学んだ後、93年神奈川県港町診療所勤務。その後、94年ルワンダ難民支援、95年阪神・淡路大震災医療活動に参加。96年から堀切中央病院(東京都)に院長として勤務。99年に東ティモール緊急支援に参加。2008年から浅草病院(東京都)勤務

2011年 東日本大震災緊急支援に参加(気仙沼市)。その後、いわき市福島労災病院(福島県)に週1回通う。2019年から21年まで高野病院勤務(福島県双葉郡)

2022年から拠点を福島県飯館村に移し、いいたてクリニックに勤務。23年にシェアの代表を退任し理事に

現役隊員が今、すべきことは?

<情報収集>

活動に全力で取り組みながら、今の活動が長い目で見て自分にどのような意味があるのかという視点を持ち、情報収集を。シェアの活動に興味がある人には、SNSやメールマガジン登録を行うのもお薦め。

<https://share.or.jp/>





お話を伺ったのは

さの けい こ
佐野景子さん
ジンバブエ/システムエンジニア/
1992年度3次隊・東京都出身

PROFILE

JICA監事。1996年国際協力事業団(現JICA)入団。総務部などを経て2001年から04年までケニア事務所勤務。外務省経済協力局(現国際協力局)出向、JICA人間開発部次長兼高等教育・社会保障グループ長の後、15年から19年までケニア事務所長。沖縄センター所長、経済開発部長を務め、22年より現職。



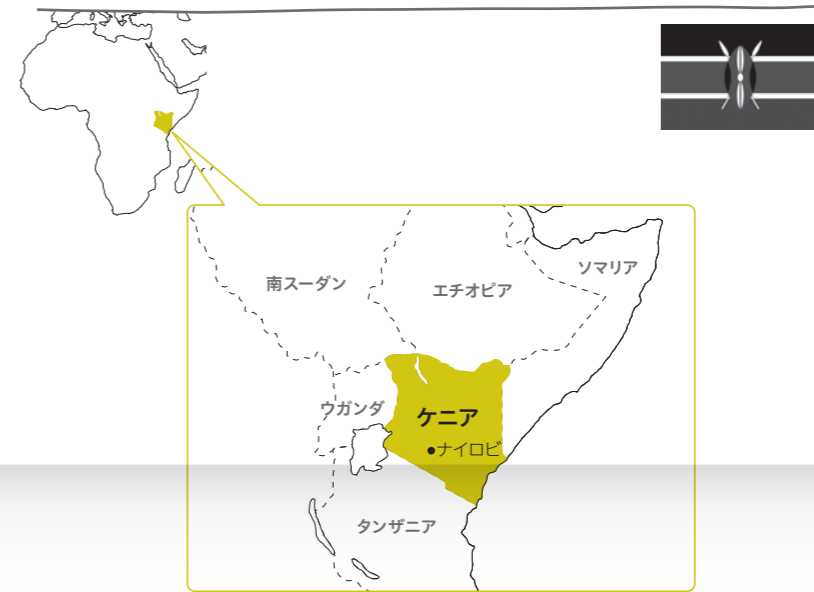
首都ナイロビ。国際連合の四つの主要事務所の一つが置かれるなど、国際協力の分野でも重要な拠点となっている(写真提供=佐藤浩治/JICA)

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈ケニア〉

独立から60年。多民族の文化を尊重しつつ、統一国家として発展してきた東アフリカの有力国。

ケニアの基礎知識



ケニア共和国

面積：58.3万平方キロメートル(日本の約1.5倍)
人口：5,300万人(2021年、世界銀行)
首都：ナイロビ
民族：キクユ民族、ルヤ民族、カレンジン民族、ルオ民族、カンバ民族など
言語：スワヒリ語、英語
宗教：伝統宗教、キリスト教、イスラム教
※2023年4月7日現在
出典：外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html#section1>

派遣実績

派遣取極締結日：1966年3月31日
派遣取極締結地：ナイロビ
派遣開始：1966年3月
派遣隊員累計：1,780人
※2023年7月31日現在
出典：国際協力機構(JICA)

アフリカ初の隊員派遣国 理数科教師、保健などの活動で成果蓄積

1963年に独立を果たしたケニア。協力隊派遣は66年に始まり、アフリカ初の派遣国でもある。国の歩みや協力隊事業の歴史について紹介する。

インド洋に面するケニア沿岸部は古くから交易の要衝として栄え、15世紀の終わりにはポルトガルがモンバサを極東へ向かう船の補給地としていて、モンバサ港は現代でも東アフリカ最大の港となっている。19世紀末以降、ケニアは保護領を経てイギリス植民地となったが、1940年代から独立運動が広がり、63年に独立を果たす。独立後は比較的安定し、発展を遂げてきた。

元JICAケニア事務所長の佐野景子さんは、その歩みが、ケニア人のプライドになっていると話す。

「複数の民族の言葉や文化を大切にしながら、統一国家を運営してきました。アフリカ連合や東アフリカ共同体の実質的なまとめ役といえる存在です。日本以外では初めてTICAD(アフリカ開発会議)の開催国にもなりました」

ケニアはアフリカ最初の協力隊派遣国でもある。初派遣は66年で、ケニア独立からまだ3年、協力隊事業開始の

翌年でもあった。初代隊員は建設機械2人と電気設備1人。以後、自動車整備などの職業教育、理数科教師、保健、農業などの分野で派遣され、時には技術協力プロジェクトと連携したりもしながら、成果を蓄積してきた。「ケニアの協力隊の特徴はチーム力。職種の別分科会や派遣地域のグループが、経験の共有や相談の場となり、活動のノウハウが引き継がれています」。

近年は経済成長に伴って都市への人口集中やごみ問題も顕著になり、環境教育や障害児・者支援、青少年活動など要請の幅が一層広がっている。

現地からの評価が高いのが、多くの隊員たちが任地の人々の民族語を積極的に学んで使っていること。「英語などではいつまでもよそ者のままだからと必要に迫られたものでも、相手に対する敬意の表れでもあり、配属先からは驚きと感謝の言葉を頂きます」。

ケニアでの注意点として、「選挙の時期は社会全体が緊迫します」と佐野

さん。選挙結果で政策が大きく変わり、与野党支持者の利害に直結するためだ。2007年の総選挙の後には、結果をめぐる暴動が発生し、1000人を超える死者と数十万人ともいわれる国内避難民が出ている。ただ、この出来事はケニア人たちが自身にとっても異例で衝撃的だったようだ。「ケニア事務所の現地職員もなぜあんなことが起きたかわからない、絶対繰り返しはけないと話していて、選挙時のテレビCMでもそうしたメッセージが流されます」。その後も選挙時には隊員の首都待機などの対応が取られていたが、13年、17年、22年の総選挙では大きな混乱はなかった。

ともあれ、「総じてケニア人とは仕事しやすいです」と佐野さん。能力が高く、空気を読む、など日本人に似た気質があるという。何よりも、「村の人も街の人も、みんな親切。隊員が困っていれば、何とかしようと動いてくれます」。

岸卓巨さん

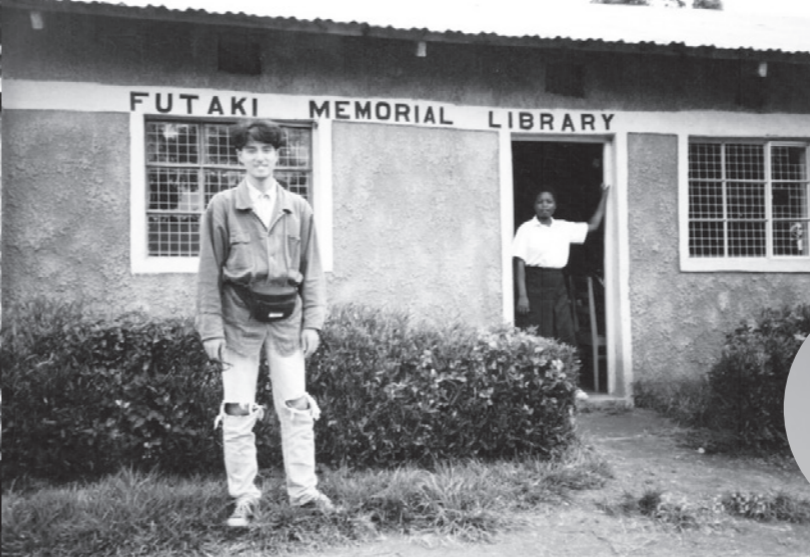
青少年活動/2011年度2次隊・東京都出身

PROFILE

大学でスポーツ社会学を専攻。ゼミの調査でバナアツを訪れた時、現地の人たちに頼まれてサッカーのルールを教える体験をした。社会人経験を経て大学院へ進学後、大学・大学院を通じた指導教官が協力隊OVであることにも影響を受け、休学して協力隊に参加した。コロナ禍の中、ケニアなどの貧困層や弱者を対象に、地域スポーツクラブを拠点に食料や生理用品などを支援する一般社団法人A-GOALを立ち上げた。



現地のコーチたちとサッカー大会を開催し、表彰式でスピーチする岸さん



自身の名前がつけられた図書館の前で、「教え子たちからニヤニヤされてしまって恥ずかしかったです（笑）」



二木洋行さん

理数科教師/1993年度2次隊・宮城県出身

PROFILE

教員を目指して教育学部で学んでいたが、「教員となる前に世界を見たい」と協力隊に応募。任期を延長して3年5カ月間活動した。帰国後は日本で塾講師として短期間働いた後、ケニアへ再渡航し、建設関係の仕事を経て、ケニア日本国大使館広報文化センターに就職して現在もケニア在住。

半世紀を超える
派遣の歴史の中で

長らく協力隊が派遣されてきたケニア。任地の社会に飛び込み、教育や環境対策、所得向上などそれぞれの活動に取り組んできた隊員たちの姿を追った。

正規教員のいない地方の学校で
基礎学力の向上に取り組む

1993年から、理数科教師としてケニアの教育の課題に向き合ったのが、二木洋行さんだ。配属先は、首都ナイロビから約450キロ離れた西部の町、ブテレにある中等学校。日本の高校に相当するが、4年制で14〜18歳が在籍していた。ブテレは当時のケニアでもかなり生活環境が厳しく、学校にも家にも電気・水道・ガスがなかった。二木さんが夜に自宅で授業の準備をする時も、ランプの明かりが頼りだった。

二木さんへの要請は生徒への直接指導。というのも、本来は政府が給与を負担して各学校へ正規教員を派遣することになっていたが、劣悪な環境を嫌って地方赴任を拒否する教師も多く、地方の学校では慢性的に教員不足が続いていた。

自分に自信がなかった。先生に出会わなかったら、こういう仕事はしていないと思う」と話していたという。

更生施設でサッカーや学習指導
出所後に訪ねたくなる場所に

大学でスポーツ社会学を学んだ岸卓巨さんは、「スポーツを通じた地域づくり」に関心を持ち、大学院へ進学。在学中の2011年9月、ケニア沿岸部のマリンデイへ赴任した。

配属先は犯罪に走った青少年たちが裁判の結果が出るまでの期間を過ごす、リマンドホームと呼ばれる更生施設。窃盗のほか、殺人や暴行などの重い内容がかかっているケースもあったが、

ていたからだ。二木さんの配属先も、従来は地元の大卒者や学生を独自に教員として雇っていて、日本の大学で教育学部を出た二木さんは、配属先で初の「正規の」教師として遇された。

受け持つことになったのは1年生から3年生の数学と1年生から4年生の化学の授業で、1日に3〜4コマ、週に21コマの授業があった。1クラスに40〜50人もいて、この人数の生徒に教えるのも大変だったが、授業を始めると、さらに大きな問題が見えてきた。

「日本でいえば中学2年生相当までの勉強は終えているはずで、実際に教科書の内容もその水準だったのですが、四則演算など、日本ならば小学6年生までに習得しているレベルさえ理解できていない生徒が多かったです」

背景には、ケニアの厳しい教育事情があった。国が直接運営する公立学校は限られていて、二木さんの配属先の学校も、地域コミュニティや保護者の資金負担で運営されていた。2週間ごとに学費が集められ、「学費が払えないと、翌日から学校に行けなくなります。親が収入を得て学費を支払うと、また通い始めるような状況でした」。

子どもたちの学力を向上させるため、二木さんが取り組んだのは、プリントを作り、日々ひたすら計算問題を練習させることだった。学校長らは「このやり方で大丈夫なの？」と心配して聞いてきたが、「必ず学力は上がるので、

路上生活をしていて保護された子どももいた。多い時には10〜18歳の男女約40人がいて、法律の規定に反して2年間ほど施設に入れられている子もいた。勉強の時間などもわずかにあったものの、裁判の日以外には、子どもたちはもっぱら手持ち無沙汰な状態だった。

施設での岸さんへの要請は、子どもたちの健康的な生活や社会性向上などのためのスポーツ指導や情操教育だった。しかし、施設の敷地は手狭で、のびのびとスポーツを楽しめる環境ではなかった。自身のサッカー経験を生かそうと「子どもたちと施設外でサッカーをやりたい」と申し出た岸さんだったが、「逃走のリスクがあるので外には出せない」と認められず、ひとまずは

見ていてください」と答えた。「数学でも化学でも、一番の基礎をおろそかにすると絶対に壁にぶつかります。学校側もそれまで正式な先生がおらず、どう教えるべきかわからない状況だったこともあり、継続させてくれました」。

練習問題を1年以上続けていると、生徒たちの能力が付き、「もつと難しい問題をやりたい」という声も上がるようになってきた。「ここがわからないけど、どういふこと？」と質問に来る生徒も増え、「子どもたちが勉強に興味を持ち始めている」との実感があつた。

そんなある日、一人の生徒が相談に来た。「勉強しようとしても、本がない。教科書もないし、図書室もない」と訴えた。当初は自費で教科書を寄贈したりもした二木さんだったが、その後、JICA事務所と協議し、理数科教師の配属先に教科書を配布できることになった。さらに地域の個人から資金を募って校内に新たな建物を造り、机や椅子も設置して図書館を開設した。図書館は生徒が教員に質問したり相談したりする場所にもなり、入口には「フタキ・メモリアル・ライブラリー」と掲げられた。

当時の生徒の一人は後にラジオのコメンテーターとなった。母子家庭で3人きょうだいという厳しい家庭環境の中、二木さんの在任中を含む4年間、ケニアの隊員有志らが運営する奨学金給付団体KESTES(※)の支援で通学を続けた。二木さんに再会した時、「以前は

情操教育のほか、基礎教育に触れる機会をつくり、子どもたちが少しでも有意義な時間を過ごせるようにと考えた。そこで始めたのは、大学卒業後に公文的なエリアマネージャーをしていた時の経験を生かした個別学習。年齢も家庭事情も異なるので学力もまちまちな子どもたちのため、各自に合わせたプリントを作成して指導を行った。また、ラジオ体操で体を動かしたり、時には日本の歌を教えたこともある。いろいろな方法を試す岸さんを手伝ってくれる職員もいたが、ただ横で新聞を読んでいるだけの職員もいた。

そうして約1年を経た頃、敷地外の農園で、施設で食べる野菜を自ら育てる取り組みが始まり、子どもたちが外

活動の舞台裏

主食はウガリ

ケニアで欠かせない食べ物といえば、ウガリ。トウモロコシなどの粉を湯で練って作られており、小麦粉の生地を延ばして焼いたチャパティや米などと同じく、主食として扱われることもある。ジンバブエのサザヤザンビアのシマなど、似たものがアフリカ各地で食されているが、ウガリはトウモロコシの外皮を多く含んでいて、ボソボソ、パサパサしているのが特徴とされる。



ウガリとサマキ（スワヒリ語で魚の意）のプレート。二木さんの派遣から約30年を経てケニアで活動中のコミュニティ開発隊員・伊治由貴さんも、やはり毎日のようにウガリを食べているという（写真提供=伊治由貴さん）

二木洋行さんがブテレの町に赴任した当時、「最初は家に調理器具どころか炭さえもなく、約2週間、食事はバナナばかりの状況」だったが、道具をそろえて生徒や親たちに現地の食材や調理法を教えてもらった時、最初に教わったものの一つがウガリだった。上述の食感や味のなさからウガリは苦手という日本人もいる一方で、二木さんは「ブテレでは米が手に入らなかったという事情もありますが、ウガリは最初から特に抵抗なく食べられましたね」と振り返る。

伊治由貴さん

コミュニティ開発 / 2021年度5次隊・神奈川県出身

PROFILE

高校時代にカンボジアを訪問。路上で生活したり物売りをしている子どもたちと出会い、生まれる国や家庭が違っただけで生きる環境が全く異なることに衝撃を受け、国際協力に関心を持つようになる。大学で国際経済について学び、建設会社に就職して社会経験を積んだ後、「やはり世界を見てみたい」と協働隊に参加。2024年春まで活動予定。



個人のバナナ農家を訪ねてバナナマンダジを作る様子



重機やトラックの周りで活動するウェイスト・ピッカーたち



加賀瀬 悠さん

環境教育 / 2019年度3次隊・長野県出身

PROFILE

電力会社に10年間勤務。人事部で研修企画に携わる中、技術支援のため途上国で働いた経験のある社員らとの出会いを通じ「海外で働いてみたい」との思いが募り、協働隊に応募した。活動中はKESTESの会長も務めてコロナ禍後の活動態勢の再興に尽力し、自らも奨学生のフォローなどを担当した。帰国後は青年海外協力協会に入職し、JICA二本松青年海外協力隊訓練所で勤務中。

に出る機会が増えた。岸さんの「外でサッカーを行う」という試みも認められ、外に出る機会が増えてストレスが解消されるためか、施設を逃げ出す子どもは以前よりむしろ減った。

その一方で岸さんは、「施設の中だけを変えても、限界がある」とも感じていた。「施設にいるのは一時期でしかない、子どもたちはいずれ去っていくが、子どもたちはいざいざですが、家庭や社会で問題を抱えていて再び非行に走るケースもありました」。

施設を出た子どもを地域ぐるみでケアできないかと模索している時、地域で青少年向けのサッカークラブを開いているケニア人コーチたちと知り合う機会があった。彼らは貧しい子どもたちを集めてサッカーの練習を行い、さらに清掃活動などの各種イベントを催したり、スポーツ特待生としての進学を斡旋したりと、子どもたちの居場所づくりや非行防止に取り組んでいた。

「施設から家に戻った子どもたちや、今後施設に入る可能性がある子供たちの受け皿になるのではないか」と考えた岸さんは、施設を出る子とコーチをマッチングしたり、クラブや任地の隊員らと共にイベントを行って、以前施設にいた子どもたちを呼んだりもした。

施設外での活動は施設にも思わぬ効果をもたらした。岸さんが地域イベントで知り合ったNGOなどを施設に招待したりするうちに、それまで外部の組織との関わりを敬遠していたようだった職

が、教員向けワークショップなどの働きかけを行う中で、学校でエコスクールを本格的に開始できるのは早くても23年になるという見込みが判明。任期中にエコスクールの活動を行うのがいよいよ難しくなった加賀瀬さん。処分場関連の活動に注力することにした。

当時、配属先ではJICAの支援の下、処分場の改善プロジェクトが進められていた。プロジェクトの進行について、配属先とピッカーたちの活動との間に問題が生じるようになった。例えば、シヨベルカーがゴミを運んだり掘ったりする際に出てくる有価物を拾おうと、我先にピッカーが近づいて危険だった。また、ゴミを押し固めて処分場内を整備していたが、ピッカーがゴミを燃やすことでそれが崩れてしまう恐れもあった。「彼らの生計手段を奪ってはいけません、行政の意向を理解してもらい、規則を守るよう呼びかける必要がありました」。

そこで、配属先でプロジェクトに携わる部署から加賀瀬さんに、「ピッカーたちに事務所の取り組みについて伝えるワークショップを企画してほしい」との要請が来た。加賀瀬さんは、体験型プログラムを通じて「シヨベルカーが下ろした直後の山積みのごみよりも、平らに整地されるまで待ったほうが、有価物を探すのに効率がいいと伝えよう」と考えた。企画したのは、ごみに見立てた紙くずとあめを混ぜて、

員たちが自らゲストティーチャーを呼ぶなど、施設での時間を充実させることに取り組み始めたのだ。「彼ら自身、外の人と関わってみて楽しかったのだと思います」。以前、岸さんの活動を横目に新聞を読んでいた職員も、子どもたちに勉強を教えるようになっていた。

岸さんには忘れられない少年がいる。施設を出た後も、時々施設に来ては、小さい子の面倒を見たり、掃除を手伝ったりしてくれた。「それまでは、どの子にとっても施設での経験が良い思い出ではなかったようで、施設を出て再び訪ねてくることなどありませんでした。彼のように顔を出してくれる子が出てきたのは嬉しかったです」。

近年、ケニアでも重視されている環境分野の課題に取り組んだのが、2021年3月に派遣された加賀瀬 悠さんだ。首都ナイロビに隣接するキアンブ郡のティカという街で、環境・水・天然資源事務所に配属されて活動した。

当初の要請は、郡内60のモデル校を対象にごみ問題や緑化をテーマにした環境教育プロジェクト「エコスクール」を進めることだったが、17年の選挙の結果を受けて責任者が交代していたり、コロナ禍で学校側の状況も変わっていたりと、すぐにエコスクールを始めら



ナイロビ日本人会の祭りでソルガム粉とクッキーを販売

山積みの状態と平らに広げた状態で、それぞれあめを探してもらうゲームだ。そのほか、ごみを燃やすことによる健康被害などについてのプレゼンテーションも用意した。

ワークショップの開催は、すでに加賀瀬さんの離任まで残り1カ月の23年2月だったのだが、地域の400人のピッカーのうち300人が参加の意向を表明。6回に分けて実施しなければならぬほどの盛況ぶりとなった。

人口増加と経済成長の続くアフリカでは、ごみの問題はケニアだけに限らない。加賀瀬さんは「ケニアでの経験を生かし、今後もアフリカの廃棄物の問題に関わりたい」と話す。

**バナナやソルガムの加工品を開発
任地の人にも馴染みの存在に**

2022年4月から、農家の収入向上のため、農産品を生かした商品開発とマーケティングに取り組んでいるのが、伊治由貴さんだ。

派遣先は、ナイロビから約300キロ離れたケリチヨ郡アイナモイ地域の農業事務所。一帯は標高2000メートル級の高地で、紅茶の一大産地であるほか、各種農作物の栽培が盛んだ。要請は農家の収入向上だったが、職員は農業指導や害虫対策など、各自の担当業務で忙しく、「何をやるかは私の裁量にかなり任されていて、最初に事

務所に行った日、『ユーアフリー、何をやってもいいよ』と言われました」。

伊治さんは職員からの紹介で地域の個人農家や生産者グループを訪ね、どういった作物を育てているのか、加工するとしたらどういった製品を作りたいのか、聞いて回ることから始めた。訪問と聞き取りを続けるうち、「加工品作りに興味がある」という何軒かの農家と出会うことができた。その後、一緒に作物を使った品物の試作を重ね、着任から約8カ月がたったころ、マーケットで販売するところまでこぎ着けた。

目下取り組んでいるのは、ケニアなどの東アフリカで一般的な揚げパンであるマンダジの生地にバナナを練り込んだ「バナナマンダジ」と、世界五大穀物の一つで現地では広く栽培されているソルガム（タカキビ）を加工して作っ

れる状況ではなかった。

加賀瀬さんはエコスクール実施に向けた打診の傍ら、自分でも街の環境について知ろうと考え、ティカの街のごみ収集の方法や処分場の状況を見て回った。「ごみは分別されることもなく、収集用のトラックに積み込まれていました。処分場では、ただひたすら、そのごみが捨てられていました」。

処分場周辺には、ごみの中から拾い集めた有価物をリサイクル業者に売って生活する「ウェイスト・ピッカー（ごみを拾う人）」が多く住んでいた。ピッカーたちはリサイクルできる物を集め、さらに、ごみの山に火を放ち、鎮火すると磁石を使って缶などを集めていた。加賀瀬さんは足しげく処分場に通ううちにピッカーたちとも顔なじみになり、現地で活動している日本人として存在を認知されていた。

そうして赴任から1年余りが過ぎた

ごみ処分場の改善事業に関与
ピッカーたちの協力・理解を得る



ピッカーを集め、ごみの中からあめを見つけるアクティビティを実施

学ぶことは変わること
—自分と地域の力を引き出す
アイディアブック

(原題: Helping Health Workers Learn)

著: デビッド・ワーナー、ビル・パウワー

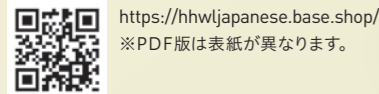
翻訳監修: 石本 馨 (マレーシア/作業療法士/1995年度1次隊)、坂本舞花、清水香子、林 かぐみ、樋口倫代

翻訳者の中のOV:

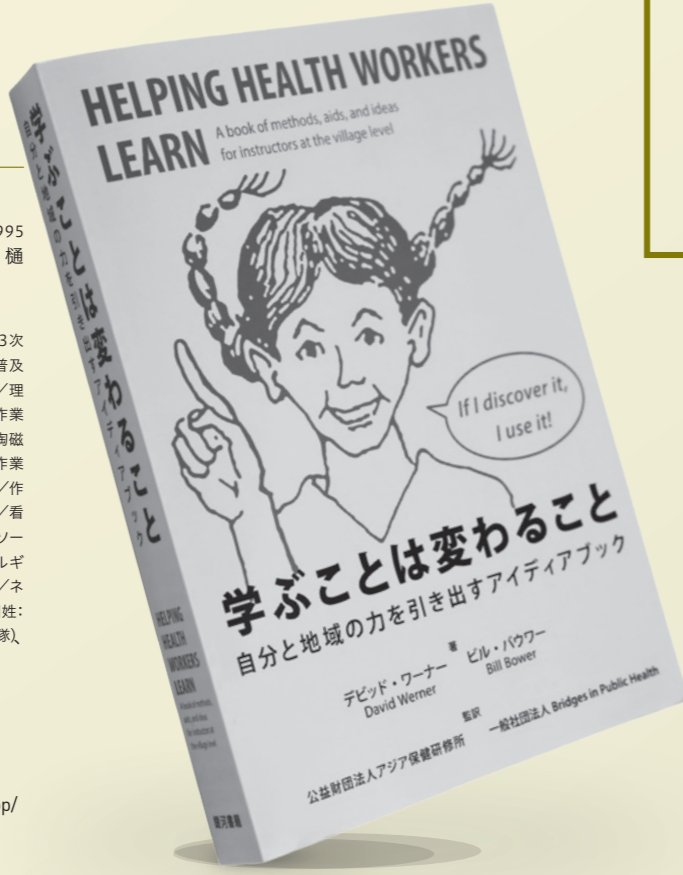
秋田真千代 (スリランカ/幼稚園教諭/1994年度3次隊ほか)、石崎 (旧姓: 中口) 美保 (チリ/村落開発普及員/2004年度2次隊)、大西海斗 (ウズベキスタン/理学療法士/2015年度3次隊)、河野 真 (マラウイ/作業療法士/2000年度1次隊)、堤 智子 (スリランカ/陶磁器/1987年度1次隊ほか)、寺村 晃 (ニカラグア/作業療法士/2011年度1次隊)、徳田千帆 (マレーシア/作業療法士/2015年度1次隊)、西川定之 (バヌアツ/看護師/2009年度3次隊)、東田全央 (スリランカ/ソーシャルワーカー/2012年度3次隊)、古川雅一 (キルギス/理学療法士/2017年度1次隊)、宮本 圭 (SV/ネパール/看護教育/2006年度0次隊ほか)、家亀 (旧姓: 水谷) 志伸 (キルギス/理学療法士/2013年度2次隊)、石本 馨

日本語版発行: 銀河書籍 (2023年3月)

監訳: 公益財団法人アジア保健研修所
一般社団法人Bridges in Public Health



<https://hwhwjapanese.base.shop/>
※PDF版は表紙が異なります。



いま、
読みたい
電子書籍

この方に
聞きました!



いしもと かのる
石本 馨さん(翻訳監修者)
マレーシア/作業療法士/
1995年度1次隊・新潟県出身

コミュニティでの活動に
生かせるヒントが盛りだくさん

地域コミュニティに飛び込み、人々を巻き込んで活動を展開する——協力隊活動の理想像ともいべき姿だが、いざ任地に降り立って現地の人と対面してみると、まず何をどうすればいいのか戸惑いを感じる人も多いだろう。

そんな時のため手元に置いておきたいのが、本書『学ぶことは変わること』だ。原著である『Helping Health Workers Learn (ヘルスワーカーの学びを助ける)』は、プライマリヘルスケアの実践・理論両面の第一人者であるアメリカのデビッド・ワーナーらにより1982年に出版された。題名のとおり、本来は保健・医療分野の人に向けた内容だが、参加型研修を企画する段取りや、教材作成時の留意点、地域の伝統を土台にしたストーリーテリング手法な

ど、現地での活動一般に共通して使えるテーマが豊富に盛り込まれている。

日本語版は、日本を拠点に地域保健課題に取り組む団体、Bridges in Public Health (BiPH) の事務局長・石本 馨さん (マレーシアOV) らがアジア保健研修所 (AHI) などと共に企画した。「AHIの清水香子さんがSNSで原著を取り上げたのがきっかけで、共同事業として翻訳版を作る運びになりました。身の回りの物で計量器具やクーラーボックスを自作する方法や、経口補水液の作り方なども、さまざまな職種の方員に役立つ情報だと思います」

翻訳・編集は協力隊OV13人を含む29人のボランティアの手によるもので、言葉が英語から日本語になっている以外には、図表や絵の配置、ページ編成な

どを元のままとしている。「日本語版を国際協力の現場で使う時、現地の人が英語版などを参照していても、すぐに照らし合わせられるように配慮しました。なお、初版が80年代のため、今では一般的でない医療技術や薬品などの記述もあるのですが、原著を尊重して本文に残した上で訳注を添えました。各自で最新の情報も確認していただければと思います」

600ページ超とかなりボリュームがある本のため、一度に読んで頭に入れるのは難しいだろう。「あらかじめ、目次や各章の冒頭部分だけ目を通しておいて、現地で課題に直面した時にピックアップして読むのがお勧めです。有料ダウンロード形式のPDF版のほか、紙の書籍版もありますよ」。

た「ソルガム粉」の2種。バナナマンダジはバナナ農家と共に、収穫したバナナを使って作っている。地元のマーケットでは、バナナの価格は1本5シリング(約5円)程度だが、バナナマンダジは1個10シリング。市の立つ毎週火曜日に80〜90個を作り、マーケット内で歩き売りをすると、好評でよく売れる。「売り上げから材料費の300〜400シリングを除いた400〜500シリングが1日の利益となり、農家の人はそれでさらに調理用の器材を購入したり、次の材料費に充てています」。

ソルガム粉については、伊治さんが関わる前から栽培農家が販売していたのだが、伊治さんは販売時によりアピールできる手段を考え、「高血圧や貧血に良い」などとソルガムの効果をアピールするポスターを作り、それを見せながら歩き売りをするようにした。この2軒が先行したが、「いざれ加工品を販売したいと話す農家が10軒くらいあります」と伊治さん。何を売りたいか相談しながら試作を続けている段階で、バナナチップスや、小麦粉などを延ばして焼く薄焼きパン「チャパティ」にバナナを加えたバナナチャパティ、他にもパイナップルジャム、アボカドオイル

心にかけているのは、農家の自主性と商品が簡単に作れること。「農家の人たち、特に女性の場合は農作業の他に家事や育児などもあつて忙しいので、なるべく少ない時間で作れて、コストが安いことも大事にしています」。また、ケニア人は食に対して保守的な面があることも注意点だという。「目新し過ぎるものを売っていると、『何これ?』と避けられてしまいます。食べ慣れている物や作り慣れている物に一工夫を加え、何を作るかはケニア人である彼らに任せることで、継続的に売れるようになると思います」

取り組みを続けるうち、町を歩いている時に「今日はマンダジ売っていないの?」と声をかけられるなど、地元なじみの存在になってきた伊治さん。地元のキプシギス語を覚えてあいさつを返すと相手も喜び、会話が弾むという。元々は人の目を気にするタイプで、コミュニケーションにも積極的でなかったという伊治さん。「自主的に行動した分、人脈や活動の幅が広がっていきまし、今はむしろそのやりとりを楽しんでいると感じています。また、毎日の活動終わりに友人とチャイを飲みつつたわいもないおしゃべりをするのが至福のひとつです。日本にいる時よりも自分らしくいられるのかな、と思います」。



自身を介して農家同士のつながりを広げることも意識している伊治さん。地元農家にレクチャーを頼み、フィンガーミレット(穀類の一種)農家グループとケーキ作りをした

活動の舞台裏

共助の精神「ハランベ」

Harambee (ハランベ) とは、「共に動こう」「みんなと一緒に」といった意味のスワヒリ語で、ケニア人の精神や社会づくりを象徴する言葉だ。政府の資金が乏しい時代に住民の寄付などで設立された中等学校は「ハランベスクール」とも呼ばれる。また、ケニア人は学費や医療費などのまとまったお金が必要な時、このハランベの精神で「資金集めの会」を催したりする。



資金集めの会の様子。最初に主催者や地域グループのチーフなどによるあいさつがあり、資金集めの目的が説明されるが、「ケニア人のあいさつは一人ひとりがとても長く、10〜20分にもなります」

ケニアで活動中の伊治由貴さんも、知り合いの農家の人に誘われて会に参加したことがある。「資金を集めたい人が自宅の庭にテントや席を用意して知人などを招き、みんなでお茶やランチをしてから、最後に各自が出せる範囲のお金をカンパするのですが、驚いたのは、『この人はいくら出してくれましたよ』と発表されることです。もちろん、会の目的は寄付を多く集めることですが、金額にかかわらず、発表することで『寄付してくれた。行為そのものをたたえる意味があるそうです。伊治さんは相場がわからず500シリング(約500円)を出したが、100〜200シリング程度が普通だったようで、周りは「おーっ」と驚いた様子。「金銭感覚の違いが表れてしまったこともあります。思い切り注目されてしまって、居心地の悪い感覚を味わいました(笑)」

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 おぐにかずこ 小國和子さん

インドネシア/村落開発普及員/1994年度2次隊、
シニア隊員/インドネシア/村落開発普及員/1998年度0次隊・
大阪府出身

日本福祉大学国際福祉開発学部・同大学院国際社会開発研究
科教授。開発人類学をベースに農村開発援助実務および研究
に携わる。研究テーマは農村開発・生活改善・フィールドワーク
論・文化と開発・月経衛生対処など。

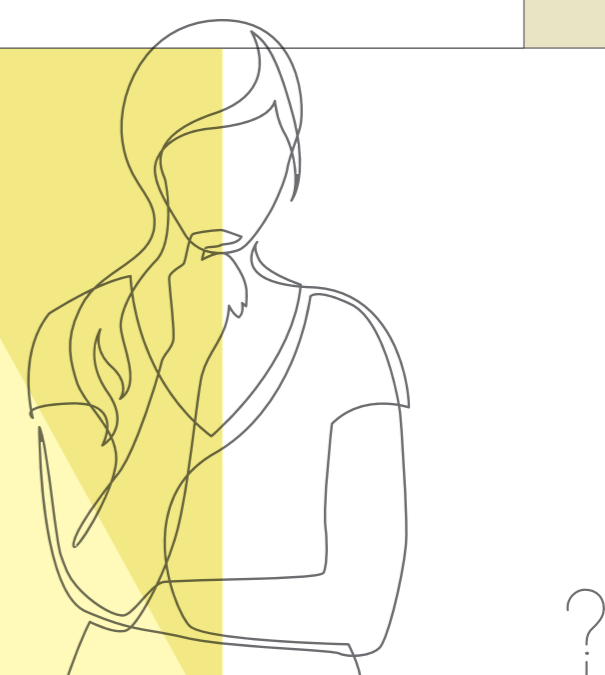
今月の
お悩み

今月のテーマ：トイレ・月経の憂鬱ゆううつ

月経時は精神的にも
余裕がなくなり、
トイレの汚さもストレスです。

(女性の〇)

派遣国では公衆トイレがとて
も汚く、個室のドアが閉まらな
かったり、トイレトペーパー
や使用済みナプキン捨てると
ニタリーボックスの設置がな
かったりすることがほとんど。特
に月経時は自宅以外のトイレに
入りたくありません。
月経痛があるときは余裕がな
くなり、不機嫌になったり、気
持ちが落ち込んだりすることも
あり、現場の空気を悪くしてい
るようにも感じます。



小國先生
からの
アドバイス

あなたの不便は現地の女性たちの不便でもあるかも。
現地の女性の声に耳を傾けて、
皆でストレスを減らしていきましょう。

トイレや月経の悩みは、プラ
イベートな問題として周囲に相
談することなく、自分の中でな
んとか工夫して折り合いをつけ
ている隊員が多いように思いま
す。私自身も農村部での隊員活
動だったので、外に出たら家
に帰るまでトイレに行きたくな
いと思っていましたし、月経
が来るとさらに憂鬱でした。

後に月経を研究対象とするよ
うになってから、女性の協力隊
員に派遣国で外出の際、使用済
みの生理用品をどうしているか
聞いたところ、トイレにサニタリ
ーボックスがないため、ビニール
袋に入れて住まいに持ち帰って
捨てているという隊員がいまし
た。また、外出先でトイレを我慢
して健康に支障をきたした隊員
がいたり、住まいの外にトイレ
があつて夜は行きたくないため、
夕方以降は水分を取らないよう
にしている隊員もいました。

日常的に避けては通れない生
理現象なのに、それぞれの女性
隊員が不便を抱えていますね。
では、現地の女性は どうしてい
るのか、聞いてみたことはありませんか。

私が行ったインドネシアの農
村部の女性たちへの調査では、
「使い捨てナプキンを洗って捨
てる」と聞き、大変驚きました。
月経の際の経血が不浄とされて
いて、使用済みナプキンをその
まま捨てることはゴミ処理の方
に失礼であり、また、経血は悪
いものに取り憑かれやすいとい
った考えもあるそうです。

例えば学校のトイレの個室
で使用済みナプキンを洗おうと
すると、片手で桶けづから水をすく
い、左手を使って床で洗わな
くはなりません。それをトイレ
に流せば詰まってしまうので、
外出先ではナプキンを取り替え
たくなくなります。中には下着
を2枚はいてその間にナプキン
を挟むことで、ナプキンへの汚
れを最小限にする工夫もされて
いるとのことでした。

こうした現地の人の苦勞を、
恥ずかしながら私は何十年間も
知りませんでした。毎年このよ
うに通っていたのに、「プライベ
ートなこと」だからと、質問し
ていなかったためです。

だから、私が声を大にして言
いたいのは、「自分が不便を感
じることは、現地の人も不便や
ストレスと感じていることかも
しれないから、現地の人の月経
事情を聞いてみて」ということ
です。

現地の人がやっていることを
試してみても、不便や、不衛生だと
感じたりしたら、それは現地が
抱える課題でもあります。もし
かしたら、その気づきで自分の
不便を解決するだけでなく、現
地の「一大トイレ・月経プロジ
ェクト」に発展する可能性もあ
ります。実はインドネシアでは、
日本のメーカーが商品化した
「洗いやすいナプキン」もありま
す。企業もこうした地域独特の
不便さに着目していると知って
目から鱗うろこが落ちる思いでした。

トイレの話でいえば、戦後、
日本の農村部で、皆のトイレの
悩みを自分事にしたことで解決
した事例があります。生活改良
普及員（農民が農業や生活に関
する科学的・実用的な技術や知
識を取得し、それを普及して有
効に活用できるようにすること
を目的に、全国各地に配属され
た県職員）の女性の話です。

巡回していた水田地域に公衆
トイレがなく、仕方なく風呂敷
を自転車に結んで目隠しにし、
その陰で用を足していたその女
性は、自分の不便を農家の女性
と共有して、竹と風呂敷で簡易
式田んぼトイレを作りました。

根本的な衛生課題の解決ではあ
りませんが、「今よりちよつと
でも恥ずかしくなく、安全で安
心できる状態にするにはどうし
たらいいか」、それを農家の女
性と一緒になって考えた好例で
す。

月経の話と聞いて、自分は関
係ないと感じた男性隊員も多い
ことでしょう。でも、家庭で、職
場で、女性の抱えるこうした課
題を知ること、トイレや衛生、
環境課題の解決や、現地ニーズ
に見合う教育機会の検討など、
より広い職種で活動の幅が広が
るかもしれません。

近年、SDGsの観点からも
世界的に「生理を語る」とい
う風潮が出てきたり、フェムテ
ック（女性がライフステージご
とに抱える健康の課題に応える
商品）が出てきたりと、医療系
の隊員でなくても、月経や衛生
関連の話を持ち出しやすくなっ
ています。私たちの月経研究チ
ームでも、男性研究者と一緒に
取り組んでいます。生理現象への
対処の仕方や意味を知ること
は、現地の文化や風習を理解す
る糸口にもなるので、性別にか
かわらず、現地のトイレや月経
事情に耳を傾けてみませんか。

砂丘の町の道場で生徒による掃除を定着



なかお ともこ
中尾智栄子さん
ペルー/2017年度3次隊・兵庫県出身

PROFILE
小学校1年生の時から柔道を始め、大学まで柔道に打ち込む。高校時代にインターハイや国民体育大会に出場。大学卒業後は夜間高校の事務や中学校の保健体育の講師をし、留学を検討していた際、大学時代の顧問に協力隊を勧められて参加。帰国後、夜間中学の保健体育教諭を経て、現在は小学校教諭として特別支援学級を担任している。

配属先: 体育庁タクナ支部
要請内容: 地域の青少年にさまざまなスポーツをする機会を提供している体育庁の地方支部にある柔道クラスで、児童・学生を中心とした約30名の柔道選手に競技力の向上を目指し精神面、技術面を指導。柔道を通して、競技に向かう姿勢や生活上の日本的な礼節や道徳の指導を行う。

この職種の先輩隊員に注目！ 現場で見つけた 仕事図鑑

#0024

「柔道」

分類	人的資源
派遣中	9人(累計:532人)
類似職種	青少年活動、体育
※人数は2023年7月末現在	

ナショナルチームの基礎技術向上に取り組む



い だりゅうこう
井手龍豪さん
マダガスカル/2017年度3次隊・熊本県出身

PROFILE
3歳から柔道を始め、高校時代には日本選抜チームで海外遠征を経験。大学卒業後、郷里の道場で教えた後、アメリカでナショナルチームなどへの指導を4年半行う。海外でさらなる経験を積みたいと協力隊へ。帰国後は柔道着メーカー勤務の傍ら大学院でコーチングを学ぶ。今年9月からスロバキアで2028年ロサンゼルス五輪出場を目指すナショナルチームとジュニアナショナルチームの指導に当たる。

配属先: マダガスカル柔道連盟
要請内容: 首都の柔道連盟で、柔道指導者に精神鍛錬を含めて指導技術向上のためのアドバイスをを行う。また、市内のクラブの柔道選手を対象に、基礎技術や柔道の精神についての指導を行う。

最大のピンチ

活動を開始してすぐ、男性のCPから「生徒が混乱するから、教えないで」と言われてしまいました。技の教え方について私が口出したこと、しかも女性からというのがプライドを傷つけたようで、半年ほど、稽古に参加するだけの活動に。言葉もうまく話せず、唯一の相談相手だった先輩隊員も任期を終え帰国し不安になったのですが、生徒の保護者が「私たちは家族よ」と温かく受け入れてくれたことが支えになり、CPとも徐々にコミュニケーションがとれるようになりました。

最高のやりがい

子どもたちが「先生、先生」と集まってきてくれる時でした。稽古に励んでくれることはもちろんですが、休憩時間にたわいもない話をして楽しく過ごせると、打ち解けてくれていると感じました。子どもたちにとっては珍しい日本人なので初めは距離がありましたが、活動後半には「先生、掃除したよ!」とニコニコして言うようになりました。柔道教室は無料なので気軽に入ってきてすぐやめてしまう子どもも多いのですが、こうした子はずっと続けてくれました。



ペルー最南端の町で柔道を教えた中尾さん。「柔道は空手やテコンドーほどポピュラーではありませんでしたが、生徒たちは柔道が好きで通ってきていました」

赴任

序盤

中盤

帰国

「柔道」隊員は省庁のスポーツ局や競技団体などに配属されて、選手への指導、練習環境の改善、現地指導者の指導力向上を行うほか、ナショナルチームの強化に取り組み場合もある。基本的に3段以上の段位が必要で、選手に対する指導経験が豊富なほど活動に生かせる。近年は障害者柔道の指導を行うケースも増えている。

CASE 1 待つ姿勢で主体性を育み 時間厳守や掃除の徹底を図る

ペルーに派遣された中尾智栄子さんの配属先は、体育庁による無料の柔道教室。小学生クラスと、中学生から大学生の2クラスをカウンターパート(以下、CP)と共に指導した。2代目の隊員で、基本的な礼節やレベルに合わせた練習などに前任者の活動が生きていた。しかし、遅刻や無断欠席は多く、開始時間になっても誰も道場に行かないことが日常的だった。「道場に時計を設置して、生徒たちに時間を認識してもらいました。そして、『時間は、先生と生徒との大事な約束。それを破られるのはとても悲しい』『連絡もなく休まれると、事故にでも遭ったのではと心配になる』と伝えました」小学生に付き添ってくる保護者がその話に納得し、時間を守る意識が広がった。しかし中学生以上には、難しい事情のある生徒もいた。「経済的に苦しい家庭もあり、連絡を入

れる携帯電話を持っていない子や、家の手伝いを優先しないといけない生徒もいて、多少の遅刻や連絡がなくても仕方ない、と思うようになりました」週に1回だけだった道場の掃除は、生徒たちが毎回行うように指導した。「砂丘がそばにある町だったので、畳がすぐに砂ぼこりだらけになってしまふ。道場を大切にしよう、自分たちが使うところはきれいにしよう」と話し、皆で畳を掃いて、拭く手順を教えました」ペルーで教室などの掃除を生徒が行うことは一般的ではないが、中尾さんはほうきの使い方から教えた。「最初はガミガミ言っていたのですが、しつこく言わずに待つようにしたら生徒たちが少しずつやるようになりました。言っただけでは待たないで、1年半後、生徒による道場の掃除が定着。リマのJICA事務所から訪ねてきた職員が「ここはペルーなのか」と驚くほどきれいな道場になっていた。

CASE 2 選手に「気づき」を促して 自ら改善・継続できるように工夫

マダガスカル柔道連盟に派遣され、選手たちの強化を目指す基礎技術の向上と、視覚障害者柔道の普及を図ったのが井手龍豪さんだ。マダガスカル柔道はナショナルチームの選手でも、派手な投げ技など力まかせの部分が多く、きちんと組んで相手を

下、CP)と共に指導した。2代目の隊員で、基本的な礼節やレベルに合わせた練習などに前任者の活動が生きていた。しかし、遅刻や無断欠席は多く、開始時間になっても誰も道場に行かないことが日常的だった。「道場に時計を設置して、生徒たちに時間を認識してもらいました。そして、『時間は、先生と生徒との大事な約束。それを破られるのはとても悲しい』『連絡もなく休まれると、事故にでも遭ったのではと心配になる』と伝えました」小学生に付き添ってくる保護者がその話に納得し、時間を守る意識が広がった。しかし中学生以上には、難しい事情のある生徒もいた。「経済的に苦しい家庭もあり、連絡を入

崩す、といった体さばきや寝技ができていなかった。そのため、柔道の基礎である受け身・打ち込みを教えた上で細かい技術を指導した。「効率よく技がかけられるつま先への重心の置き方や、柔道着をつかむ際に指先で引っかければ疲れないことをやってみせ、どうすれば技が入るのか、生徒自身が気づいて動けるように教えました」指導者への配慮も欠かさなかった。「皆さん熱意を持って指導し、マダガスカル柔道を支えてきました。敬意をもって、その技術や考え方にプラスする形で、より良い稽古の方法と一緒に作り上げる姿勢で臨みました」各クラブは週2回の練習だったが、選手強化には圧倒的に足りないと感じた井手さんは、週に6日間、体育館の一角を借りて無料の自主練習会を行った。

任期が残り1年になった頃、マダガスカル柔道の可能性を広げたいと、視覚障害者柔道クラスを現地の指導者と立ち上げた。メンバーは井手さんらが街中で声をかけて集めた。指導を2年ほど受けたそのうちの一人は昨年末、東京で開催された国際大会に出場するまでに育った。「子どもも大人も、健常者も障害者も、所属やレベルに関係なく同じ場所で教えました。彼らが一緒に稽古することで互いに刺激になりますし、大人は子どもを、強い選手は障害者をサポートし、寄り添って柔道を学んでいける場づくりができたと思います」

最大のピンチ

地方のクラブに指導に行った時、食中毒になってしまったことです。初日の稽古を終えて子どもたちと街を歩いている時に、「先生、ココナッツの実を割った中にある白いところがおいしいんだよ」と勧められて一緒に食べたら、一人だけあたってしまいました。それから翌日朝まで嘔吐と下痢、胃が引きちぎられるような痛みが続き、痛み止めをいくら飲んでも効きませんでした。翌日の稽古は気力でなんとか行いましたが、隊員生活で一番つらい経験でした。



マダガスカル柔道選手たちと井手さん(前列中央)。「海外の生徒は知識から柔道を学ぶことが多く『柔道家はこうあるべき』と言うと素直に行動してくれます」

最高のやりがい

出張指導に行っ子どもたちに教えた翌日、その親の方々から「子どもたちが『学校に行きたくない、今日も龍豪と柔道をしたい』と言っている」と言われたことが心に残っています。また、視覚障害者の選手のもとにJICAオフィシャルサポーターの高橋尚子さんが来られた時、「僕は目が見えないから弱い人間だと思っていたけれど、龍豪先生に教わって変わった。今、僕は強いんだ」と話すのを聞いて、教えていて良かったと感無量でした。

赴任

序盤

終盤

帰国

みんなの教材づくり & アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、
お役立ちアイデアをご紹介します。

立体の模型で
いろいろな形を
理解しよう

ジブチの初等・中等教員養成校と附属小学校で活動した佐々木綾香さん。前回の紙製時計に引き続き、今回も算数の授業に役立つ教材を教えてくださいました。

「算数ではいろいろな形の立体を学びますが、どんな種類があり、それぞれがどういう構成になっているか、板書だけではなかなか把握できません。そこで、実際の模型を見て、触って覚えてもらおうと教材づくりをしました」

佐々木さんは作り方を教員養成校の学生に対して教えることで、帰国後も教材づくりを継続し、それぞれの学生が附属小学校で行う授業で活用してもらえるようにしました。



今月の先生
ささきあやか
佐々木綾香さん
(ジブチ/小学校教育/2019年度1次隊、2022年度9次隊・北海道出身) 大学を卒業後、北海道で小学校教諭として10年間勤務した後、2019年に現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加。新型コロナウイルス感染拡大による一斉帰国を経て、22年に再派遣。23年3月に帰国後、復職。



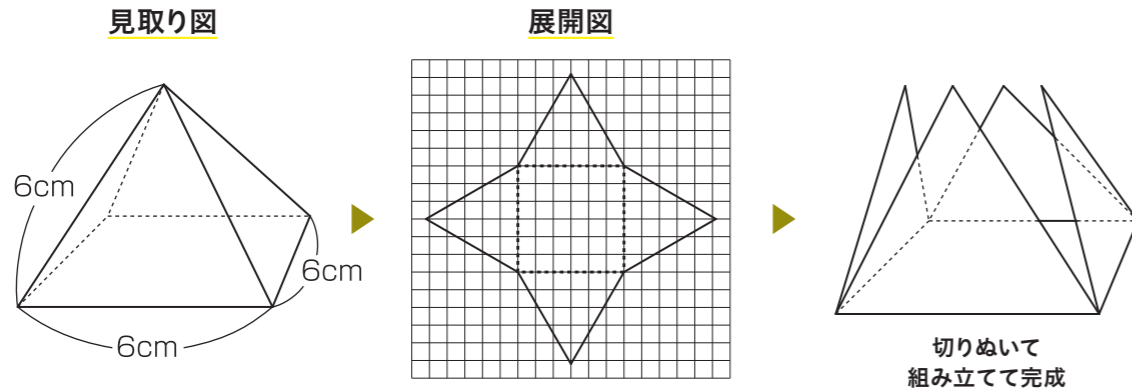
立体の模型でいろいろな形を学んだ子どもたち

2 立体模型の作り方の例

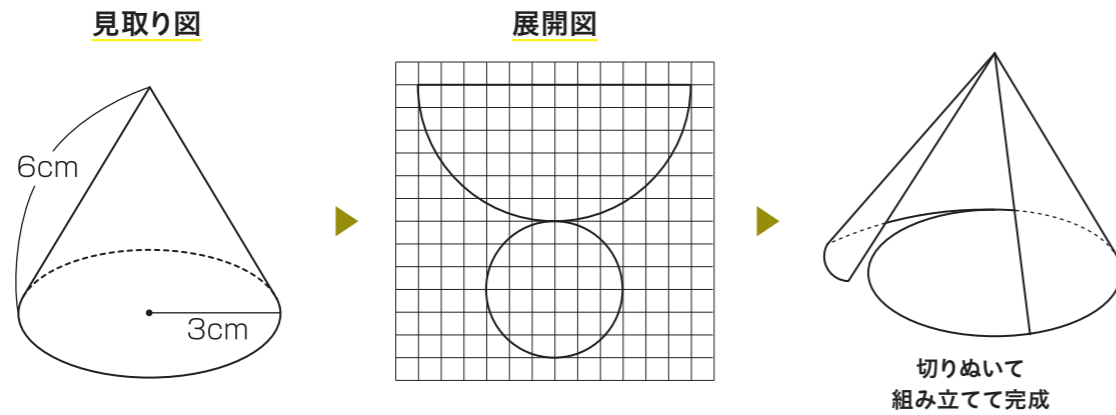
最初に私が描いた見取り図を見てもらい、学生たちにそれを基にエクセル方眼紙に展開図を描いてもらいます。展開図がイメージできない学生には、一つずつの面がどうなるかを一緒に確認しながら描いていきました。方眼紙を使う

ことが初めての学生も多かったので、一つひとつのマスの縦横が1cmであることや、作図の際には直角や直線を意識して描くことも指導しました。このときに作った立体は、立方体、円柱、四角錐、三角錐、円錐などでした。

四角錐の場合



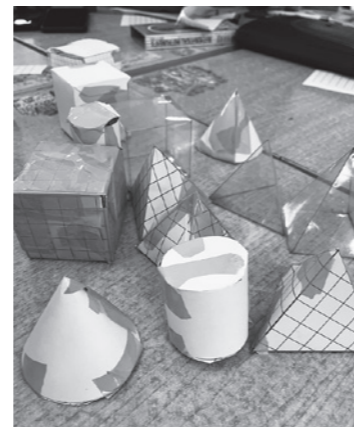
円錐の場合



作った立体模型は、4、5年生の授業で使用しました。板書に描かれた立体を見るだけでなく、実際の模型を子どもが触ってどんな形かを体験した後、辺や頂点、面の数を数えたりして、把握します。また、継ぎ目を完全に留めていない模型も作って、立体から展開してみることもしました。



授業では立体の辺や頂点、面の数を数えて理解していった



教材として作ったさまざまな立体の模型

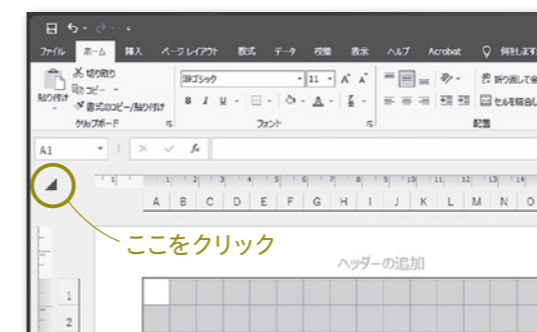
立体の模型の作り方

1 エクセル方眼紙の作り方

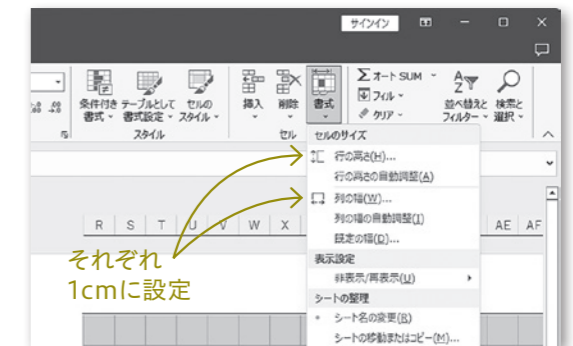
まずはパソコンでエクセルを使用して1cm刻みの方眼紙を作ります。



①エクセルのウィンドウ下部にある「ページレイアウト」をクリックして、ページレイアウト表示にします。



②セルの左にある数字の上の右下向き三角をクリックしてすべてのセルを選択します。



③上部メニューの「ホーム」タブにある「セル」の「書式」をクリック→「行の高さ」に1cmと入力、「列の幅」も同様に1cmにする。これですべてのセルが1cm四方になります。

④印刷した時に1ページに収まる分のセルを選択して、「ホーム」タブ→「フォント」の「罫線」をクリック→「格子」で各セルに線をつけてから印刷します。印刷時の設定は「拡大縮小なし」にしてください。



エクセル方眼紙に展開図を描く学生たち

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

JICA和歌山デスク の経験が 地域の魅力に気づく きっかけになった



今月の先輩

原 奈央さん Nao Hara

サモア/小学校教育/2018年度3次隊、
2022年度9次隊・和歌山県出身

就職先：和歌山県庁

事業概要：紀伊半島の南西側に位置する和歌山県は、豊かな海と山に囲まれ、果物や野菜栽培、漁業が盛んなほか、観光資源も豊富。各地域に県の振興局があり、地域に密着した県政を行っている。

原 奈央さんの略歴：

- 1992年 和歌山県生まれ
- 2017年 4月 大学院卒業後、小学校の講師として勤務
- 2018年 3月 小学校を退職
- 2019年 1月 協力隊員としてサモアに赴任
- 2020年 3月 コロナ禍のため一時帰国
- 2020年12月 JICA和歌山デスクに国際協力推進員として勤務
- 2023年 1月 JICA和歌山デスクを退職
- 2023年 2月 サモアに再赴任
- 2023年 3月 帰国
- 2023年 4月 和歌山県庁に入庁

JICA海外協力隊ウェブサイト

「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



大学院時代にバンングラデシュ出身の留学生と出会い、海外に興味を持つようになった原奈央さん。「いつか海外で働きたい」と思いながら小学校で理科の講師をしていたが、友人から「『いつかやろう』は、結局、やらないよ」と言われ一念発起、退職して海外に行くことを決めた。

「社会人の経験が浅い自分に何ができるか考えた時に、協力隊なら挑戦できるかと思い応募しました」

配属先は南太平洋サモアの小学校。基礎計算力アップを目指し、原さんは学習到達度が遅い子どもたちに少人数での授業を実施。簡単な問題で解ける喜びを感じてもらおうと、子どもたち

1 協力隊時代 2019年1月～2020年3月



配属先のレウルモエガ小学校の生徒たちと原さん

要請内容は、小学校4～8年生（日本の小学3年生～中学1年生）の理科・算数の指導です。配属先の小学校は先生の数が足りないため、1人の先生が複式学級で2学年同時に授業をしていました。最初の半年は、担任の先生を手伝っていましたが、途中からは授業についていけない子どもたちを別の教室に分け、私が「計算の基礎を教えることにしました。また、宿題が学力に合っていなかったため、子どもたちが解ける簡単な内容に変えました。問題が解けることが嬉しかったのか「もっと宿題を出して」「答え合わせをして」と、算数に興味を持ってくれるようになり、私も嬉しかったです。

2 JICA和歌山デスク 2020年12月～2023年1月

帰国後しばらくは短期のアルバイトをしていましたが、再渡航には時間がかかりそうだったので、募集していたJICA和歌山デスクに応募し、国際協力推進員として働くことになりました。主な仕事は、学校の出前授業、協力隊の応募相談、民間連携の推進など、和歌山県でのJICAの窓口、広報活動でした。

3 和歌山県庁に応募 2022年5月

提出書類 ▶ 履歴書、自己アピール論文

一般行政職には「通常枠」の他に特定分野の活動に打ち込んだ人を対象にした「特別枠」があり、私はJICAでの経験を生かすため特別枠に応募しました。自己アピール論文には、協力隊の経験がJICA和歌山デスクの仕事に生かされたことや、視野が広がったこと、そして、和歌山デスクの仕事で改めて気づいた和歌山の魅力を広く知ってもらいたいと思うようになったことを書きました。

ちのやる気を引き出していった。

しかし、2020年3月、新型コロナウイルスの感染拡大により日本に一時帰国。JICA和歌山デスクで働きながら渡航再開を待ったが、サモアは水際対策が特に厳しく、渡航再開も見通せなかった。「サモアには戻れないかもしれない」と考え始めた原さんが、就職先として真っ先に思い浮かべたのが県庁だった。

「和歌山デスクの仕事では、県内全域あちこちに向いて活動していました。その中で、和歌山で生まれ育った私も知らなかった地元の良い気づくと共に、いろいろな人と出会うことで地域の役に立ちたいという思いが強くなっていききました。県庁で働いている協力隊OVに、海外出張や海外赴任があることも聞きました。そこで、チャレンジする気持ちで県庁の採用試験を受けることにしました」

県庁の採用が決まった後、協力隊事務局からサモアへの渡航が再開されたとの連絡が来た。再赴任する間開かれたが、迷わず再赴任を決定した。県庁にも事情を説明し、入庁前の短期の再赴任が実現した。

現在は、和歌山県の新人職員として、有田地域の魅力発掘に取り組んでいる原さん。

「いずれは、県庁職員の立場で、教育や国際協力にも携わりたいと思っています」

現在の仕事

和歌山県の有田地域を管轄する有田振興局地域振興部企画産業課に所属し、地域の観光をPRする仕事をしています。有田地域は有田みかんが有名ですが、他にもしょうゆ発祥の湯浅町、有田川町の棚田、広川町のピーチ、熊野古道など、魅力がたくさんあります。今はそれらを日本や世界に発信するため、地域を回って新たな魅力を発見しようとしているところです。県庁は数年ごとに異動があるので、これからのいろいろな経験をさせてもらえると思います。



山々に広がる畑で育つ有田みかんは全国的に有名



パンダの着ぐるみを着て有田地域のPRイベントを盛り上げる原さん

後輩へメッセージ

私は学生時代も、協力隊時代も、県庁に入りたいと思ったことは一度もありませんでした。しかし、協力隊での活動がJICA和歌山デスクでの仕事につながり、そこでの経験、出会いから地域のために県庁で働く道もあると気づくことができました。将来の夢、目標も、出会う人、経験によって変わっていくものだと思います。その時々の人との出会い、経験を大切にしたら、いろいろな将来が見えてくると思いますし、それを大事にしてほしいです。

4 1次試験 2022年6月

1次試験は、公務員として必要な一般知識や能力を問う基礎能力試験、行政や法律など専門的知識を問う専門試験、論文です。論文のテーマは、「コロナ禍で生じた課題の一つ挙げ、その解決のために県が取り組むべき施策について、あなたの考えを述べなさい」だったと思います。テーマは試験当日に出されるため、過去の問題から傾向を考え自分なりに準備はしていましたが、予想外の出題にパニックになり、何を書いたかあまり覚えていません。

5 2次試験 2022年7月

2次試験の面接では、サモアでの協力隊の活動や生活について聞かれました。それについては想定していたので、簡潔に、しっかり答えられたと思います。一方で、「特別枠で応募しているが、協力隊の経験は特別なのか」という想定外の質問にはうまく答えられませんでした。

6 採用決定 2022年8月

7 サモアに再赴任 2023年2月

前回とは違う首都近郊の小学校に配属され、主に8年生を担当しました。再赴任中、1日休みをもらって以前の学校を訪問し、かつての教え子やホストファミリーに再会することができました。子どもたちが大きくなっていて感動しました。短期間でも、戻れたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

2023年4月 入庁

派遣から 始まる 未来



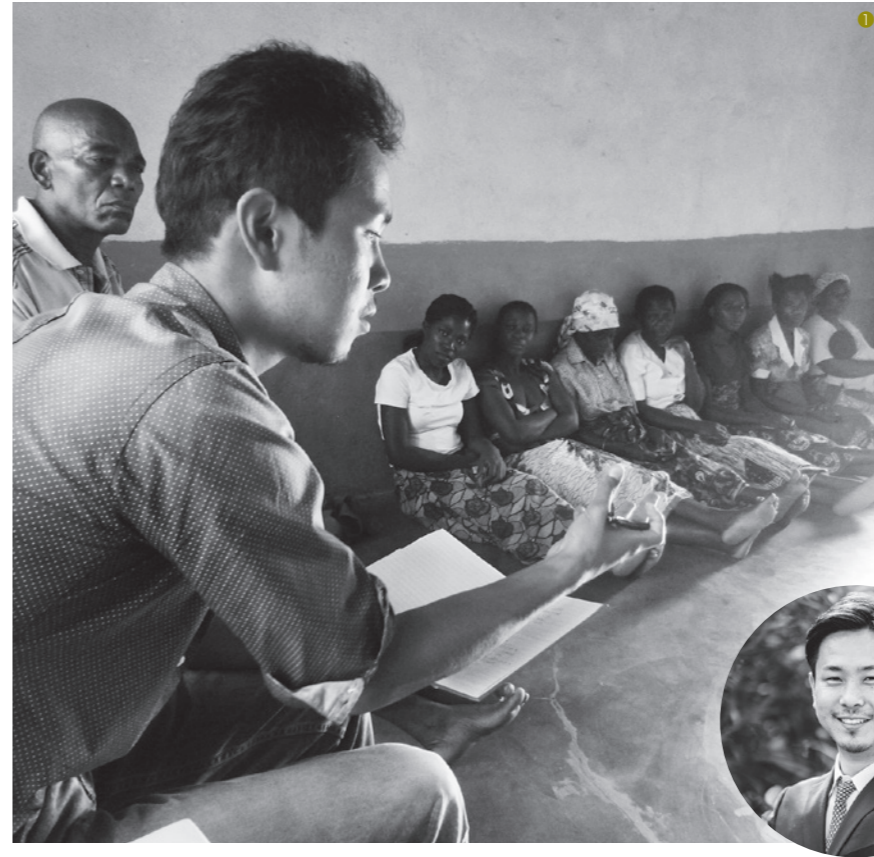
進学、非営利団体入職や
起業の道を選んだ先輩隊員

アフリカ連合開発庁
インフラアドバイザー

砂原遵平さん Jumpei Sunahara

マラウイ/コミュニティ開発 / 2014年度1次隊・京都府出身

第1回JICA海外協力隊 帰国隊員 社会還元表彰
国際協力キャリア賞



積み重ねた国際経験を糧にアフリカ投資の懸け橋を目指す

『第1回JICA海外協力隊 帰国隊員 社会還元表彰』で国際協力キャリア賞を受賞した砂原遵平さん。国内金融機関や協力隊を経て、OECD（経済協力開発機構）日本政府代表部、AUDANEPAD（アフリカ連合開発庁）と、国際的なキャリアを積み重ねていて、隊員活動後に国際協力分野で活躍するモデルとして評価された。

砂原さんが国際協力の道に進むことを決めたのは大学時代。グラミン銀行（※）のマイクロファイナンスについて知り、金融を通じて貧困問題を解決したいと思ったのがきっかけだ。

「まず日本社会で働く際のルールや一定の専門性を身につけたほうがいい」という周囲の助言を受け、卒業後は信用金庫に就職した。3年9カ月間、法人や個人事業主の融資担当として顧客営業や金融の専門性を身につけ、協力隊員としてマラウイに渡航したのが2014年。北部の農村で農家の収入向上という観点から、自身の金融知識を生かした活動を模索した。

の仕組みに着目した砂原さんは10のグループを定期訪問し、帳簿を毎週見せてもらうなどモニタリング調査を行った。「いきなりは見せてもらえないので、現地語を活用しながらさまざまな時間を共にし、記帳や金銭管理の仕方をアドバイスしました」。

帳簿の調査を1年ほど続けると、お金の動きのみならず、村の人間関係やグループのユニフォームの有無によるモチベーションの差、それによる貯金額の違いなど、ビレッジバンクによる経済的・社会的効果が見えてきた。そこで好事例を他のグループに普及させるなど情報を還元し、集会への出席率や貯金額の向上につなげることもできた。帰国後はビレッジバンクの知見を論文に取りまとめた。論文はJICA緒方貞子平和開発研究所のフィールドレポートとして公表されている。

当時、マラウイの農家は公的な金融機関にアクセスできず、10人ほどの農家（主に女性）から成るグループが毎週決まった日時に集まり、貯金や融資を行っていた。集まった資金で1年分のトウモロコシの種と肥料を買うのが目的で、リーダー、帳簿をつける人、金庫を管理する人などが投票で選ばれていた。ビレッジバンクと呼ばれるそ

「これまでの経験から得た強みは、第1回JICA海外協力隊 帰国隊員 社会還元表彰」で国際協力キャリア賞を受賞した砂原さん。国内金融機関や協力隊を経て、OECD（経済協力開発機構）日本政府代表部、AUDANEPAD（アフリカ連合開発庁）と、国際的なキャリアを積み重ねていて、隊員活動後に国際協力分野で活躍するモデルとして評価された。

砂原さんはその後、イギリスのブラッドフォード大学院で開発経済学の修士号を取得し、「国際機関で働くならまず日本政府の立場を知ろう」と、外務省在外公館専門調査員に応募。38の先進国が加盟するOECDの日本政府代表部員としてパリへ赴任し、投資政策などに携わる。21年3月からは、南アフリカ共和国に本拠地を置くAUDANEPADでインフラアドバイザーとして、広域インフラ開発や貿易の円滑化を担当している。



- 1 ビレッジバンクに興味を持つ農家にワークショップを行う砂原さん
- 2 1年間留学したイギリス・ブラッドフォード大学院時代。多様な人種の学友と国際課題の議論をするなど刺激的な毎日を送った
- 3 AUDA-NEPAD前長官のイブラヒム・アッサン・マヤキ氏と砂原さん

※グラミン銀行…女性を中心とした貧困層の自立支援を掲げ、無担保・低金利の融資を行うバングラデシュの銀行。チッタゴン大学教授、ムハマド・ユヌス博士が1976年に始めたプロジェクトが起源で、83年に正式に設立された。



一には、隊員として二国間支援の現場で、国際機関で多国間の現場でそれぞれ経験を積んだこと。第二には、OECDで旧宗主国の立場、AUDANEPADで旧植民地側の立場でそれぞれ働いたこと。第三には国際機関と、一加盟国としての日本との両方の立場も経験していること。さまざまな視点を経たことが私の独自性になっていると思います」

その上で、「現場で何が起きているのか考えて、意思決定できるのはマラウイでの隊員経験があるから」と述べる砂原さん。

「草の根にいかにつけるかを考えずして、上流にアプローチすることは適切ではありません。アフリカには発展の余地が十分にあります。日本の優れた

技術力や革新的なアイデアなど多くのポテンシャルを最適化していくことが日本・アフリカ双方にとって重要です。根拠に基づく情報を広く正しく伝え、日本とアフリカの橋渡しとなり、現地での日本の投資・関与を増やしていくことが、現場を知る私の重要な役目だと考えています」

今後国際機関や開発機関を視野に入れ、さらにステップアップしていきたいと考えた。そして、同じく国際的なキャリアを築きたいという人に向けてはこうアドバイスする。

「協力隊でどういう成果を出したのか、プレゼン用の10分、面接用の1分、立ち話用の5秒と、3種類のストーリーを用意しておくときっと後で役に立つはずですよ」

砂原さんの歩み

1987年、福岡県生まれ。2歳の頃京都府に移住。



高校の先生から語学と欧米文化、国際関係論を学ぶことを勧められ、それらが学べる大学に進学しました。

2010年3月、関西外国語大学英米語学科卒業。



国際関係論の授業で、バングラデシュのグラミン銀行のことを知り、国際協力に興味を持ちました。

2010年4月、国内の信用金庫に就職。



苦しい状況に置かれた企業の経営者や個人事業主に融資するという仕事に奔走しました。ここで身につけた顧客営業スキルや問題解決力は今の自分を形成する柱になっています。

2014年6月、協力隊でマラウイへ。



赴任後半年ごろ、活動に苦しんでいた際にJICA二本松訓練所の北野一人所長（当時）からの「現地の物を食べ、現地の人と遊び、現地語を学べ」という助言でシマ（※）を食べまくる中で、人々の懐に入るきっかけができたと思います。シマを食べた量ならどの隊員にも勝つと思います。

2017年、ブラッドフォード大学院で開発経済学修士号取得。



大学院選びは、1年で修士号が取得できることと、多様な人種が集まることが決め手でした。

2018年、OECD日本政府代表部で投資政策および責任ある企業行動（RBC）に従事。



専門調査員の派遣先ではOECDを第一志望にしていたのですが、希望がかなうとは思っていませんでした。ここで国際投資の専門性と外交的な英語表現、人間関係の構築、立ち居振る舞いを学びました。

2021年3月～ AUDA-NEPADに勤務。



驚いたのは、上司がマラウイ北部の出身だったこと。ここでも現地語のトゥンブカ語がきっかけで、上司と信頼関係を築くことができました。

※シマ…トウモロコシの粉をお湯や水で練った食べ物で、ザンビアやマラウイにおける主食。肉・魚・野菜などの副菜と共に食べる。

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

天皇皇后両陛下が帰国した JICA海外協力隊員と御懇談

JICA海外協力隊帰国隊員の代表が7月12日、皇居（御所）において天皇皇后両陛下に御懇談の栄を賜り、派遣国での活動をご報告致しました。帰国隊員と両陛下との御懇談は、1965年に青年海外協力隊が発足した当初から今日に至るまで続いています。今回帰国したJICA海外協力隊員は、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響を受け、日本への一時帰国を余儀なくされながらも、日本での待機期間中には、現地へオンラインでの支援活動や能力強化などを行い、これらをまた現地に戻った際の活動に生かすなど、コロナ禍を乗り越えて派遣国での活動に従事しました。

両陛下にお目にかかったのは大西 寛さん（SV／マレーシア／理科教育／2021年度9次隊・兵庫県出身、63歳）、西中純子さん（SV／セルビア／障害児・者支援／2021年度9次隊・福岡県出身、70歳）、松村妙子さん（日系SV／パラグアイ／日本語教育／2018年度3次隊・群馬県出身、71歳）の3名です。御懇談後、参加者からは、「両陛下とも終始にこやかに、うなずきながら報告を聞いてくださった。両陛下のお心遣いに感動した」「協力隊に参加して良かったことなどについて、全員にご質問いただいた」「協力隊の活動に深く関心を寄せてくださり、幅広くご質問いただいた」などの感想をいただきました。



御懇談前に田中明彦理事長と面談。前列左より松村さん、田中理事長、西中さん。後列は大塚卓哉理事長室長、宮崎 桂理事、大西さん、橋 秀治青年海外協力隊事務局長

NEWS

愛媛大学との連携による JICA海外協力隊派遣に関する覚書を締結

6月30日、愛媛大学の仁科弘重学長とJICA四国の山村直史所長が、ガーナ共和国への感染症対策支援を目的としたJICA海外協力隊派遣に関する覚書を締結しました。覚書では、愛媛大学が取り組むマラリア研究を生かして、毎年学生など1～2名を、ガーナ大学の研究機関である野口記念医学研究所へ派遣します。この派遣により、同研究所の研究技術向上、ガーナ共和国における医療技術向上、マラリアワクチンの性能向上に貢献すると共に、愛媛大学の国際協力分野での人材育成につながるとしています。仁科学長は、「ガーナにおける医療技術向上という国際貢献のみならず、将来研究者として活躍が期待される本学の学生らにとって貴重な海外経験が積めることを期待しています」と述べ、山村所長からは「野口記念医学研究所へのJICA海外協力隊派遣は今回が初めてであり、より高い研究成果が望めると思います」と、共に期待を込めて語りました。

NEWS

慶應義塾大学と海外協力隊派遣連携覚書を締結

7月25日、JICAはガーナ共和国ダニエル・オカイテーイ臨時代理大使臨席の下、慶應義塾大学とJICA海外協力隊派遣のための連携に関する覚書を締結しました。本連携では、2024年から3年間、慶應義塾大学SFC研究所ベースボールラボが、体育会野球部員を中心としたラボの関係者を夏休み時期に毎年10名程度ガーナ国に派遣し、青少年への野球の指導を通じて総合的な人づくりを目指します。なお、慶應義塾大学は、ガーナ大学と連携して「JICAボランティアが実施するベースボールシップ教育（※）がもたらす効果」の研究協力を長期にわたって行う計画です。JICAがグローバルアジェンダに掲げる「スポーツと開発」分野の長期的な効果測定は先駆的な試みであり、野球が人材育成にどのような成果を上げるのかが注目されます。

※ベースボールシップ教育…野球・ソフトボールの指導を通して青少年少女の「規律・尊重・正義」などの精神を育む教育メソッドであり、「ベースボールシップ」は英語のBaseball（野球）＋Sportsmanship（スポーツマンシップ）をかけた造語。

クロスロード [2023年9月号]

第59巻第8号 通巻690号
発行日 2023（令和5）年9月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊のウェブサイト
でも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



編集後記

特集「協力隊後の仕事を考える」では、協力隊出身の経営者の方々に、隊員時代の失敗談もお話いただきました。失敗してもそれはチャレンジしたからこそ。失敗も人生の糧になると感じて、勇気ももらいました。（干川美奈子）

7月号からリニューアルした「仕事図鑑」とくに「最大のピンチ」のコラムには、活動の参考になるエピソードもあり、ぜひご注目を！（阿部純一）

連載「いま、読みたい電子書籍」では保健系の活動アイデア本を紹介しました。環境教育OVの私から見てもコミュニティでの活動に使える内容で、誰にでもおススメの一冊です。（飯淵一樹）

JICA海外協力隊派遣現況

（2023年7月末現在）



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	31	3
エチオピア	1	
ガーナ	40	
ガボン	9	1
カメルーン	20	
ケニア	38	
ザンビア	14	
ジブチ	7	
ジンバブエ	10	
セネガル	21	
タンザニア	4	
ナミビア	12	
ベナン	10	
ボツワナ	22	1
マダガスカル	28	
マラウイ	23	
南アフリカ共和国	9	1
モザンビーク	22	1
ルワンダ	39	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	15	
インドネシア	13	1
ウズベキスタン	11	2
カンボジア	23	
キルギス	16	
ジョージア	5	1
スリランカ	9	
タイ	17	3
タジキスタン		1
ネパール	1	
東ティモール	9	
フィリピン	5	
ブータン	22	6
ベトナム	35	
マレーシア	15	6
モルディブ	1	
モンゴル	22	3
ラオス	14	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
サモア	1	1
ソロモン	12	
トンガ	4	1
バヌアツ	3	1
パラオ	22	3
フィジー	12	1
マーシャル	2	
ミクロネシア	2	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	8	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	24	
チュニジア	17	1
モロッコ	14	
ヨルダン	26	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	2	1	1	
ウルグアイ	4			
エクアドル	14			
エルサルバドル	16			
キューバ	3			
グアテマラ	27	1		
コスタリカ	17			
コロンビア	5	1		
ジャマイカ	5	1		
セントルシア	14			
チリ	8	1		
ドミニカ共和国	15		8	
ニカラグア	9	2		
パナマ	4	1		
パラグアイ	25	3	3	
ブラジル			36	2
ペリース	7			
ペルー	20	2		
ボリビア	20	2	1	
ホンジュラス	15			
メキシコ	4	4		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	961 (399/562)	73 (58/15)	49 (18/31)	3 (2/1)	1,086 (477/609)
累計 （男性／女性）	46,929 (24,782/22,147)	6,642 (5,364/1,278)	1,594 (616/978)	551 (255/296)	55,716 (31,017/24,699)

あの日、地球の、あの場所で。

エジプトで豊かな食に感謝

エジプトに赴任して意外だったことは、食材がとても豊富なことでした。特に私が住んでいたハルガダはリゾート地とあって外国人向けのスーパーやスーク（市場）が多く、いろいろな食材が手に入りました。日本では野菜や果物をあまり食べなかったのですが、スークには取れたてが山積み陳列されていて、輝いて見えました。それで、エジプトに行く前から好きになりました。



Illustration = 牧野良幸 Text = 阿部純一（本誌）

生々しく、店の奥は暗く、なんだか怖い感じがしたのです。

配属先の上司に肉屋の話をしたら、「日本ではどこで肉を買うの?」と聞くので、「スーパーでラップしてある切り身を買つ」と答えたたら、顔をしかめて「それは新鮮じゃない」と言われました。

大家族が多いエジプトでは、価格がリーズナブルなスークを日常的に利用します。肉は量り売りされていて、目の前でカットしてもらつのが当たり前なので、スーパーの肉は新鮮ではないと感じたのだと思います。

同僚の女性の家にお邪魔したときに、羊の料理をいただいたのですが、一緒に食べた仲間の隊員は、これまで食べたエジプト料理の中で一番おいしかったと言っていました。それはその家の家畜の羊をさばり出してくれたというのを後で知りました。

エジプトでの食体験を通じて、自分が動物の命をいただけて生かされていることに、感謝しなければいけないと改めて思いました。

西川知余子さん
エジプト/コミュニティ開発
2014年度1次隊・大阪府出身

教える人

みやしげまな
宮重真奈さん
ウガンダ/小学校教育/
2021年度1次隊・東京都



学生時代に幼児教育と初等教育を専攻し、ケニア、ルワンダ、ウガンダに渡航し、保育・教育の現場でボランティアを経験。2020年度3次隊でベナン派遣が決まったが、コロナ禍で待機となり、任国変更になった。将来もアフリカに関わることをしたいと模索中。



今月の料理

From Uganda

学校の購買でも定番 じゃがいもの煮込み

●材料

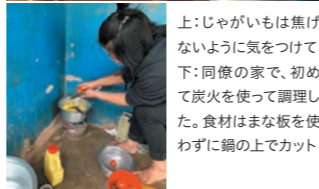
- じゃがいも..... 中5個
- トマト..... 1~2個
- 玉ねぎ..... 小1個
- しょうが..... 少々
- ニンニク..... 1カケ
- ピーマン..... 小1個
- 塩..... お好み
- 油..... 少々

●レシピ

- 1 じゃがいもの皮をむき、水に浸してでんぷんを取り、油を引いた鍋で焦げないように注意しながら炒める
- 2 ニンニクとしょうがはすりおろす。トマト、玉ねぎ、ピーマンはみじん切りくらいのサイズに切る
- 3 じゃがいもに少し火が通ったら、鍋に②を入れ、じゃがいもが浸るくらいの水を加え、じゃがいもにしっかりと火が通るまで煮込む
- 4 すべての野菜に火が通ったら、塩を入れ、味を調える

<アドバイス>

ウガンダで驚いたのは、じゃがいもが日本のものより味が濃くておいしいこと。じゃがいも料理もいろいろありますが、この「じゃがいもの煮込み」は家庭や学校の購買などでもよく見かける料理で、あまりにもおいしいので同僚の家で作り方を教えてもらいました。同僚の家ではまな板を使わず、鍋の上でカットしていくので汚れものが出ませんでした。炭で調理したので③で鍋にふたをしましたが、ガスで調理する際には不要だそうです。



上:じゃがいもは焦げないように気をつけて
下:同僚の家で、初めて炭火を使って調理した。食材はまな板を使わずに鍋の上でカット

暮らしている市、町、村



任地はコロールという国内最大の町で、アジアからの出稼ぎ労働者や日本・アメリカ・オーストラリア・台湾の援助スタッフなどの外国人も多い国際的な場所です。付近に海水浴に適した砂浜などはありませんが、夕日が本当に美しいのでよく仕事帰りに港へ見に行き、暗くなって野犬が現れる前に急いで帰っています。

公開！ 私の派遣国生活



[パラオ]

つぶらち あこ
園知愛子さん

(栄養士/2022年度1次隊・大阪府出身)

活動の様子



教育省のフードサービスプログラムという部署で、国内18の公立小中学校の給食事業をサポートしています。献立作成や、食材の調達、調理員への指導・研修、調理場の衛生立ち入り検査、児童への食育など関わる業務はさまざま、離島にある3校も3カ月に1度は訪ねるようにしています。パラオでは学校給食の歴史がまだ10年に満たないので、衛生管理の意識や調理技術の不足、必要食材の不安定な供給、野菜の摂取が少ない食習慣など、さまざまな面での課題に日々立ち向かっています。

食べ物



① 現地の魚やタピオカなどを取り入れた学校給食 ② 収穫したばかりのタロイモ

現地の食材で私が好きなのはタロイモで、茹でてそのまま食べてもおいしいです。ただパラオでは、地元で採れた食材は身内で消費する習慣があるので市場に出てこず、タロイモも知り合いからもらうしかないので難点です。日本の食材や調味料がスーパーでも手に入るので、タロイモのお好み焼きを作ってみたこともあります。

住まい



コロールのアパートの1室に住んでいて、栄養士という職種柄、現地の食材を研究し、新しい献立を考えたりするために、オープンなどいろいろな調理器具を台所に持ち込んでいます。野外で調理員の研修やクッキングデモンストレーションなどを行う日には、家からカセットコンロや調理器具を持って出かけることも。雨が多くて水不足は減多にない土地柄なのですが、短い停電は時々起きたりしています。

写真提供 = 園知愛子さん Text = 飯淵一樹(本誌)